

門凡 4
號 3629
表

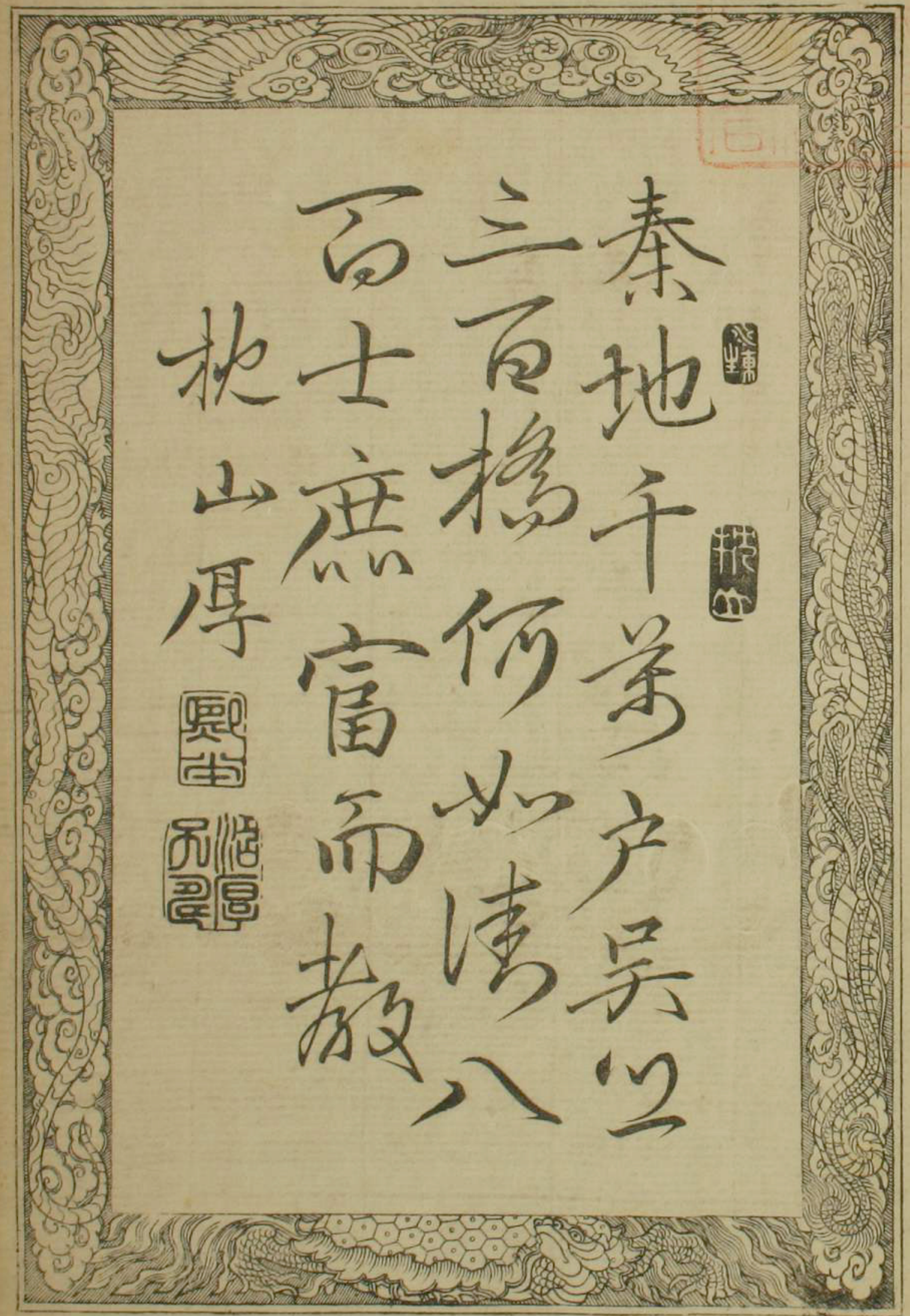
秦地千為戶吳以
三百橋何如清八
百士庶富而教
枕山厚

世

世

興

世



昭和廿一年
十二月
天日
海

天地をけりて後考へたり万世を産ぬきむかひたる所を
 考へては代もさしよみもつゝは空よりひらき武蔵野の
 谷をぬかすねやん光り子繁昌するよろ川の民乃家居る
 豊せつゝも子ハ冊子とてその榮えゆくは海をこ
 天長地久なるまほき我任ふは事なるも成もあはる
 ゆえも不ひあしと隅田川の流はまよせとて花を山
 の子子をまけと玉川の流きあがれ子花は品川を流
 海を流は底をたぬく書やの及古き何の免つむり
 流永縁の大江戸のうらゝ絵圖のなほ武蔵野の
 山を流すのさあさう流しゝとて尾花のまのさ

何ひを考へて大考しつゝもつゝなるをのりにおもひれ昔を
 見るまのちはたすゝ實永の大繪圖も花乃流の板子
 〳〳を流は世なりとてあはれまの流世の何りゝとて事
 〳〳もつゝ天上帝子生とて流るねりひ花の
 〳〳も家の〳〳四方流するものも流もあはるまれと
 〳〳も流しわつゝらんやされは絵圖を暮しゝとて櫻
 木子流考せと冊子とて同好の人乃覽子具とて云

嘉永五年癸丑春

橋本玉蘭齋識

武藏國の江戸も豊島荏原の二郡もかきり上古のすゞく武藏野の肉まで
とくもあくわきりもあつれぬ廣漠の野よりありされがたの境もさ
あつれど武藏野といつたり古の十郡も跨りて西の秩父郡東の海
北の河越南の向ヶ岡都築が原に至るとねんりる江戸の東北方
わく申古の中武藏江戸ともいふこれより上古の事を考ふる
仁徳天皇四十八年春戸田真人とて武藏國豊島郡小菟世
ひるふ二匹の狐を得て帰り奏すとゆふとあり是江戸の河より乃
事あつてこれバホの頃とて狐狸の住するまことに人跡
とえあつて系野ありとておのひやとて
平兼盛の奇ふ

武藏野を霧のちんけんは霞せがれ未遠きん地とせよこれ

武藏野の督通光の奇ふ

ひさし野のちも杖のそとせられたいある風の未だ吹くえ

監命婦の奇ふ

武藏野の月の入るさ山もけ尾花が未だつるあつて雲

此餘武藏野を練せり古秋ありありぬべれどもとてくはつて
小違あつて武藏野といへを漸くするかぎりもまた系野のまじりて
おのりて右に載る和衣れあまがら子江戸の地はわからざるに
似たりといども最系為家の秋ふ

むさし野のちもやねすだぬ隅田川遠き後うれおとひつ

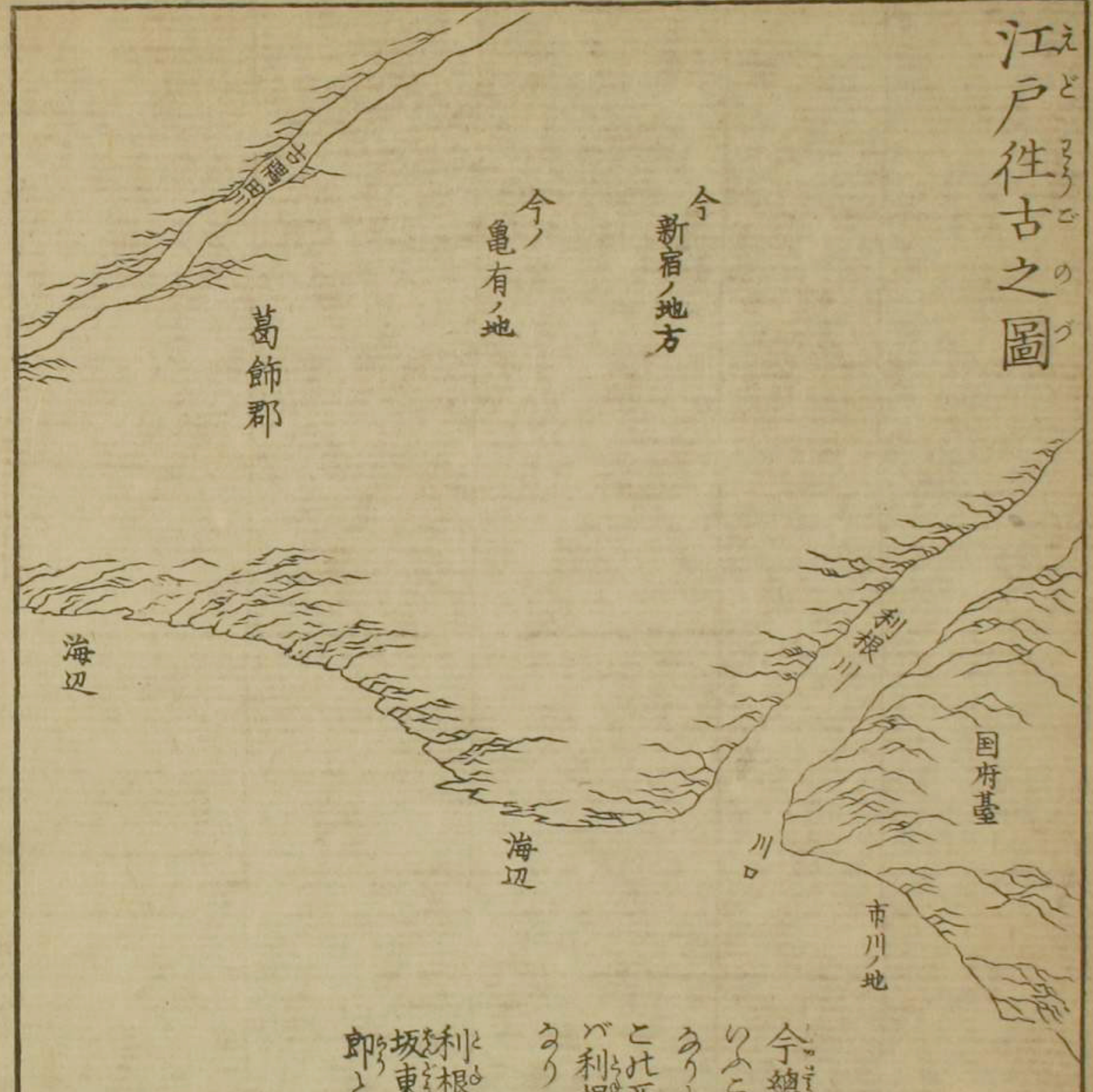
これらも系野より東の國に往還するの途多く此途りせよ
ねんべれが江戸の地のぬづくとせよ

往古の奥州街道といふ稲毛池上より今丸の内に出る本町の通りより、統籠町を小舟より、小舟町を通り、浅草親世寺乃門前より花川戸押揚を歴る古三谷古隅田川といふより、往來せしとあり、此道筋正しき様もかたれどもさもありしあり、又此の地は昔ハ霞が関かき平川町の方より浅草門前より、此の地は統籠町ありいぬ子存る並木の六地蔵石燈籠ハ往古の馬野籠の立場ありといふ

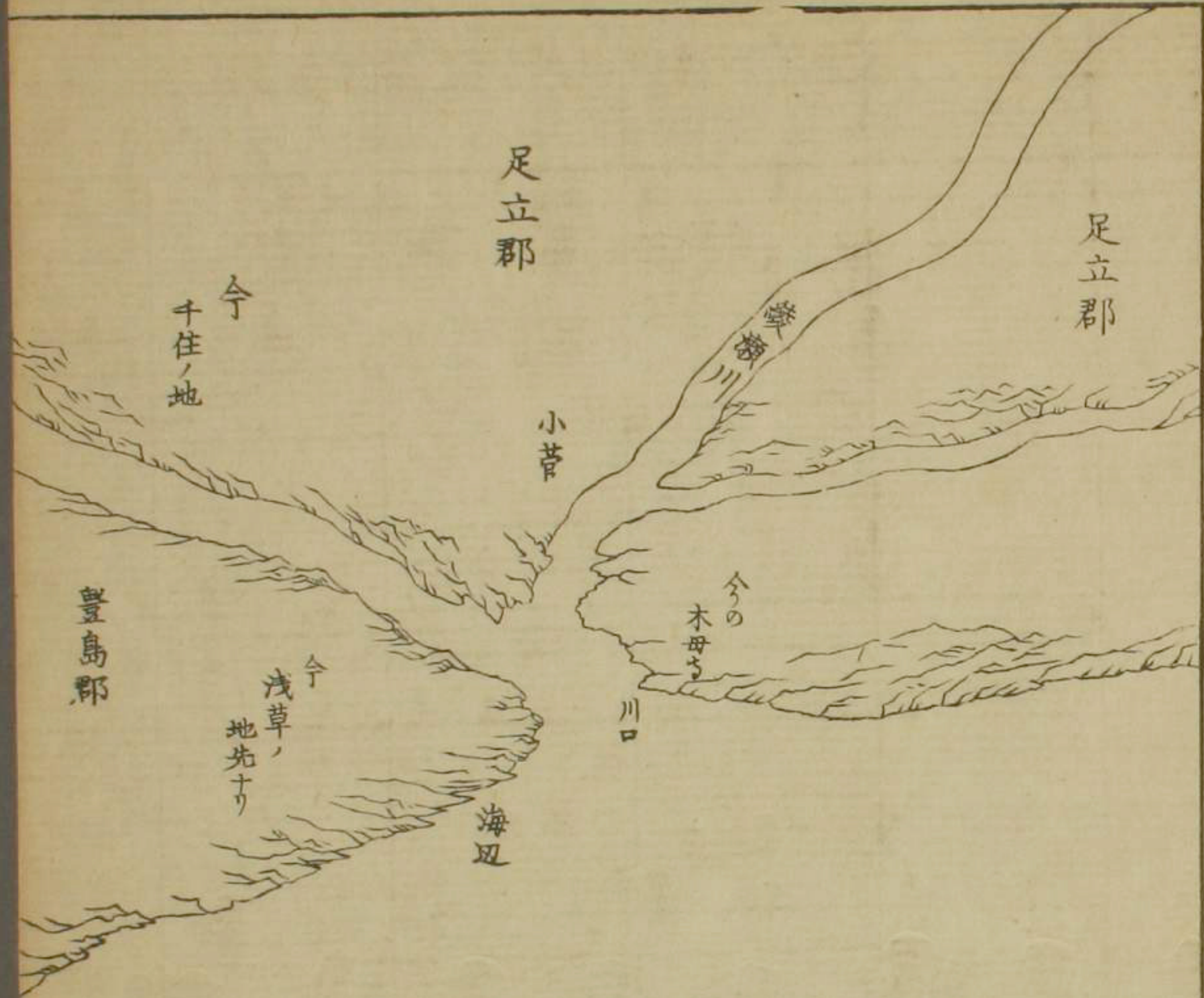
江戸の地をみるく荏土ともかけらるるまき、荏の多くせしる地を名りく名付しあり、荏京郡といふ名のあるもいふありし云、東鑑に治承四年九月廿四日丁丑使治使彼召江戸太郎重長依景親之催、遂石橋合戦といふ事見えり、是より後重長が子江戸太郎忠重

二郎親重出世、其の江戸の地を領せしあり、その後上杉家當國を治せし、其の彼家人等が所領江戸よりありしと見えり、長祿文明の頃の太田道灌入道江戸の城を築き居住ありし、やがて家居も年月を抄ひ多く建つた、これハ徳守の多くてありし、びとて其のころ関東にて人々の信仰ありし安房國ある、海崎明神を神田小鎌倉の荏柄天神を湯島よ齋き、祭事ありしとて、天正十八年八月朔日御打入ありしより、四里四方を江戸と定めぬし、より大船倉とありて、古京坂の盛ありしと見え、なりし比を、つともありし、はなはだ八町ありし、あれども今ハその一語ありし、千町ありしといふ、橋その沿革のふいふついでに載る圖説もてあるべし

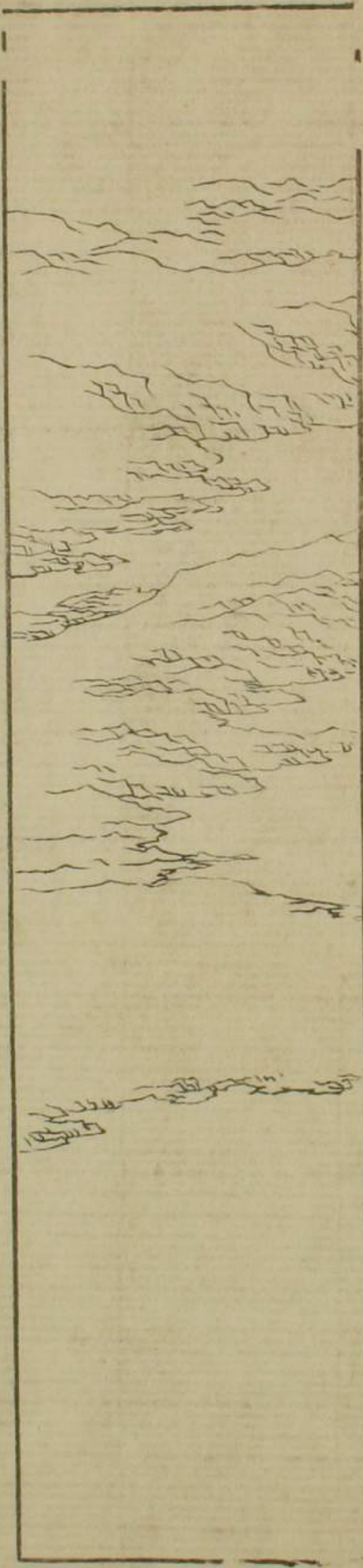
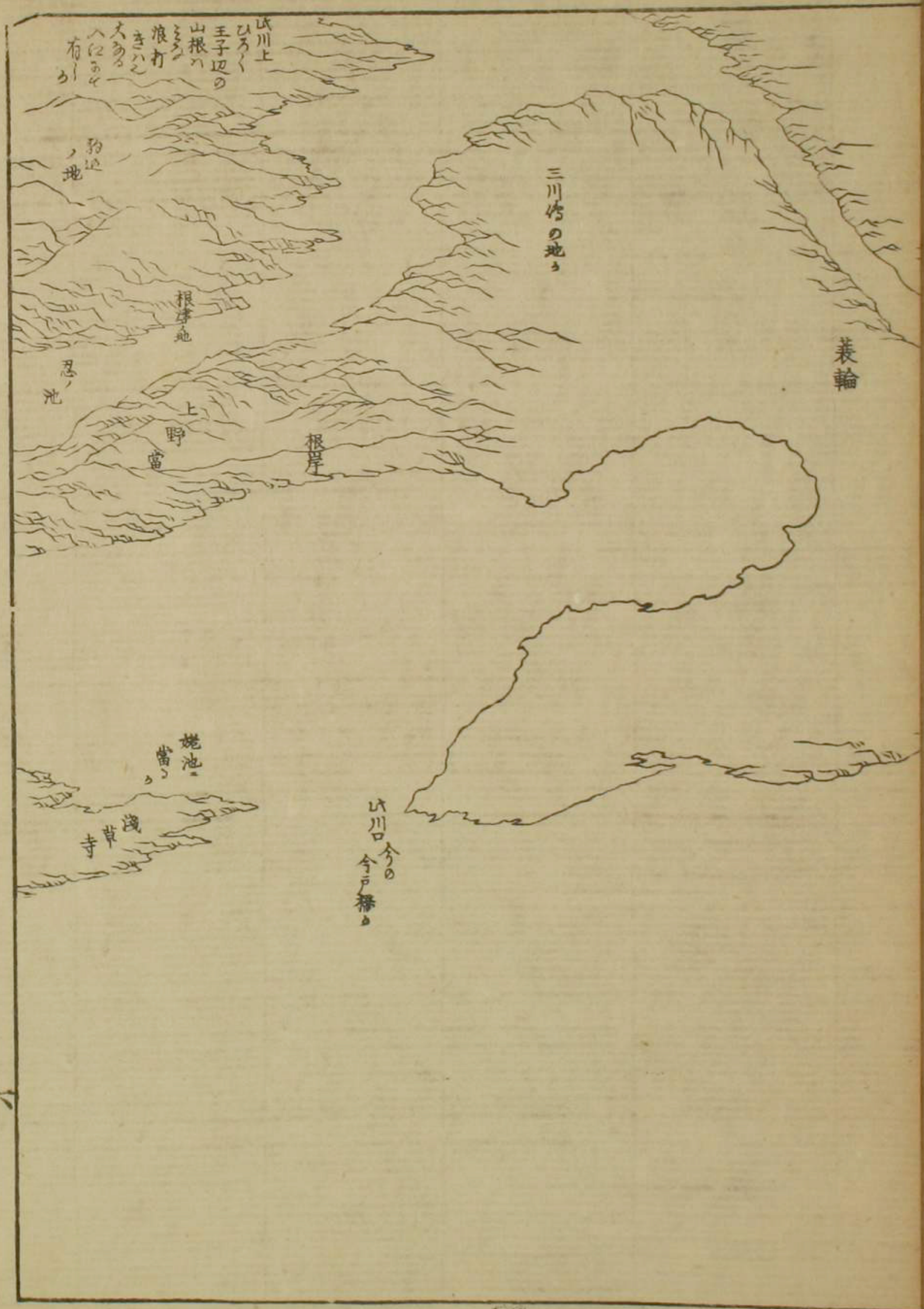
江戸往古之圖



今總寧寺のうしろの山と城山との
 のここの安房国里見美廣の城跡
 ありと云傳ふ国府臺の軍といふ
 こと此所のことなり山上よりんかろせ
 ば利根川の流木のどとて要害の地
 なり
 利根川の武藏下總のさうひみ
 坂東一の大河なり俗に坂東太
 郎といふ

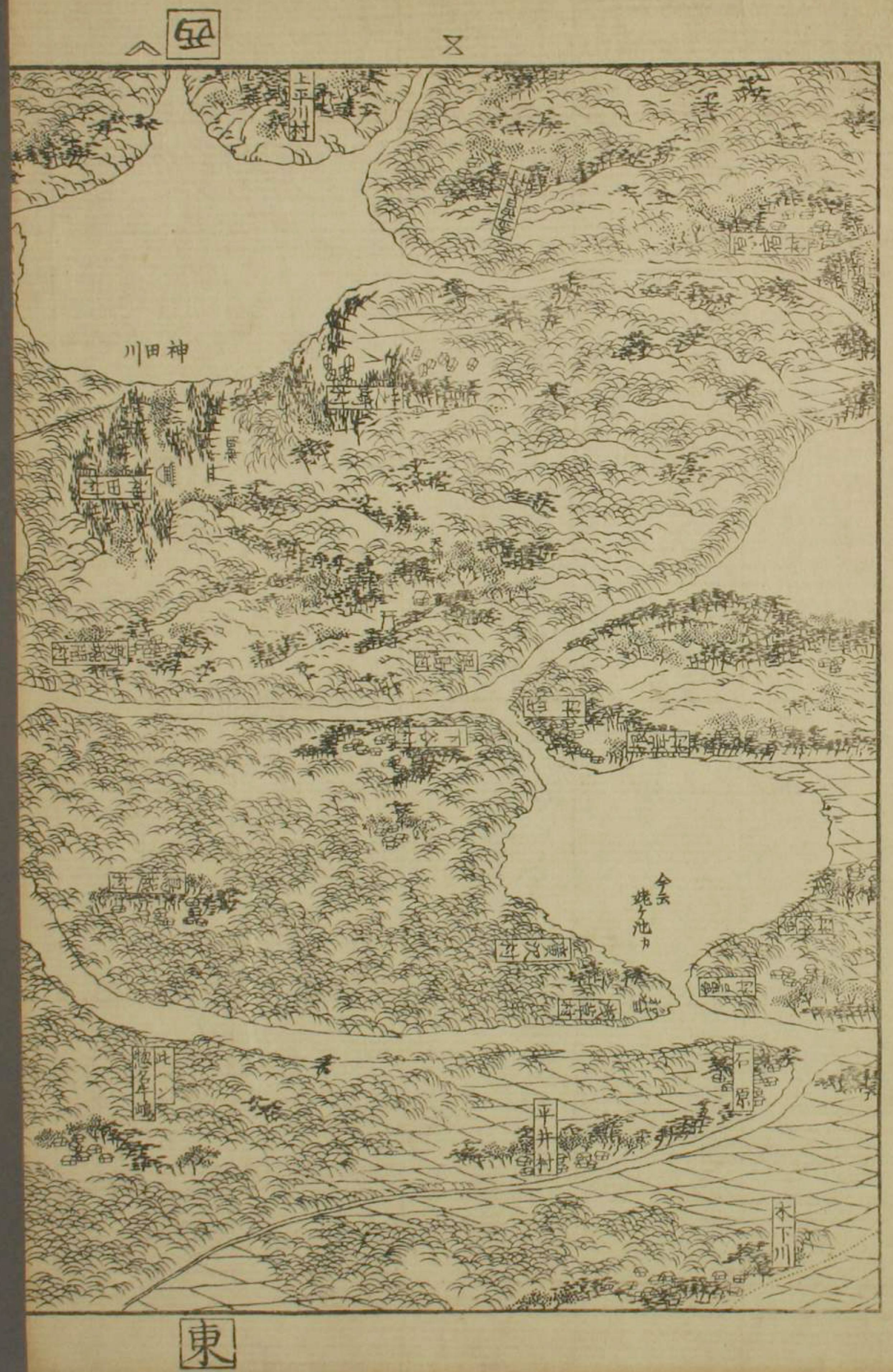
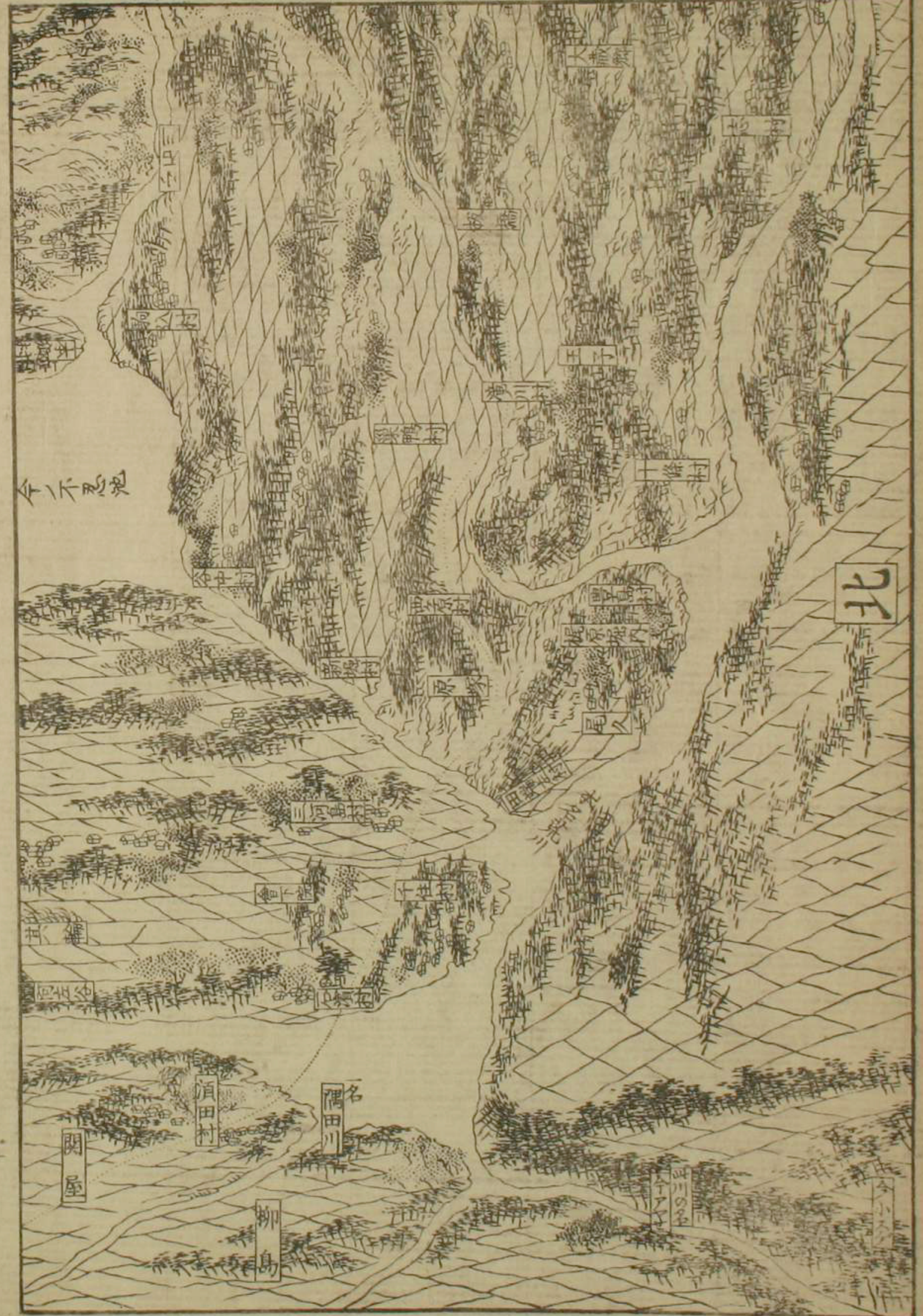


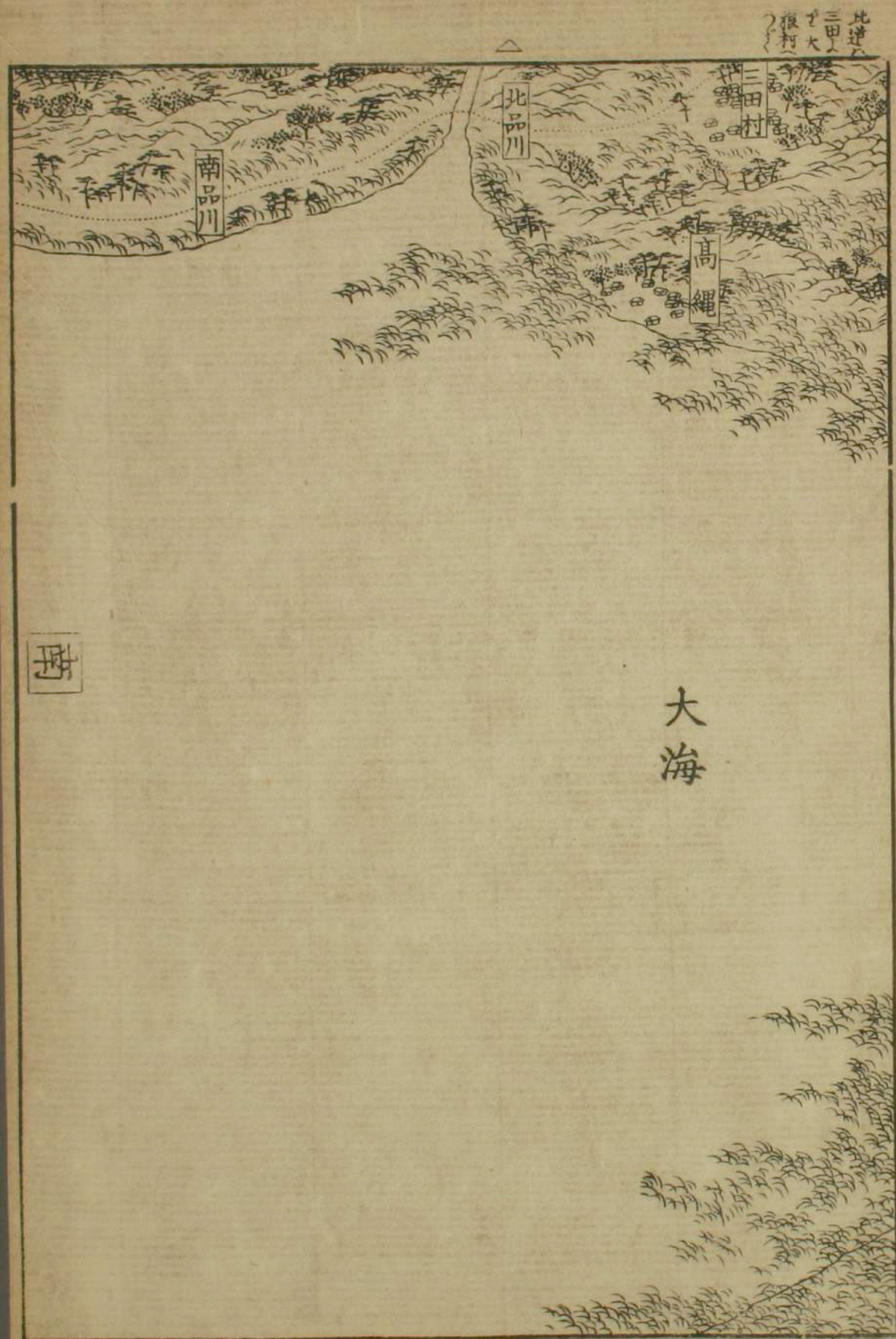
綾瀬川の末より東へさかす
 中川への一派あり今ハ小溝
 ありとも土人おぼへてこれを
 古隅田川といふなり今これを
 溝と足立葛飾の境とせり

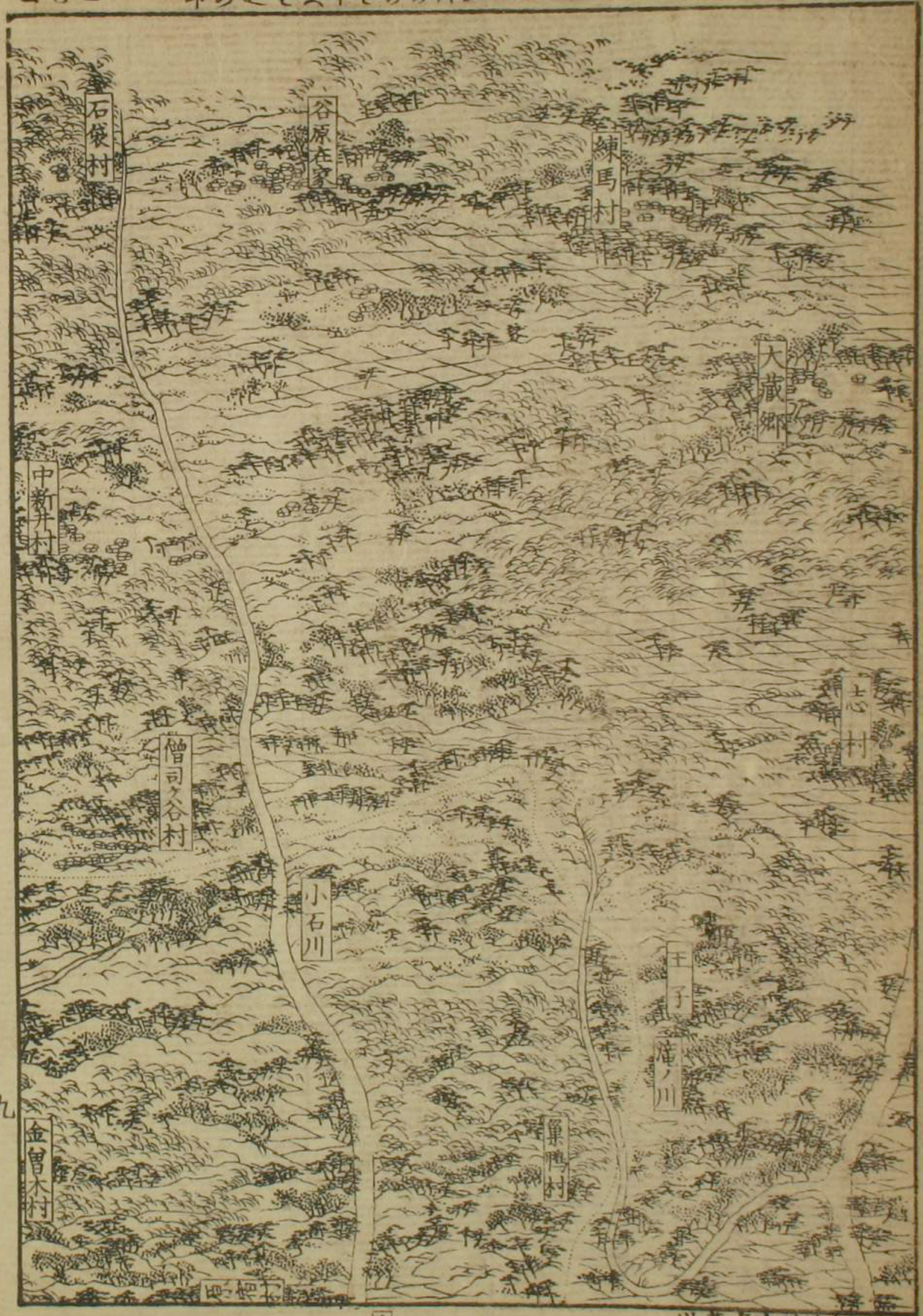


右の圖を見るに古の地誌をこれに合其詳あることを知るべしといふ
 も長元の以河内守頼信上野守より仰じ時平忠常を討んとて兵を以て
 仍向ふに常が住所入海の邊より入るる向あり陸を廻らば七八日も加
 らん直に海に即日攻つる海に舟をこれにせん頼信のいふに
 海は浅水のなりといふこと宇治拾遺物語に云く按て予業忠
 常が居所に下総あり此の海といふは今の香田川の事なりねと
 されこの圖は保を其のくく入海ある地と云ふべし

永祿年間江戸圖

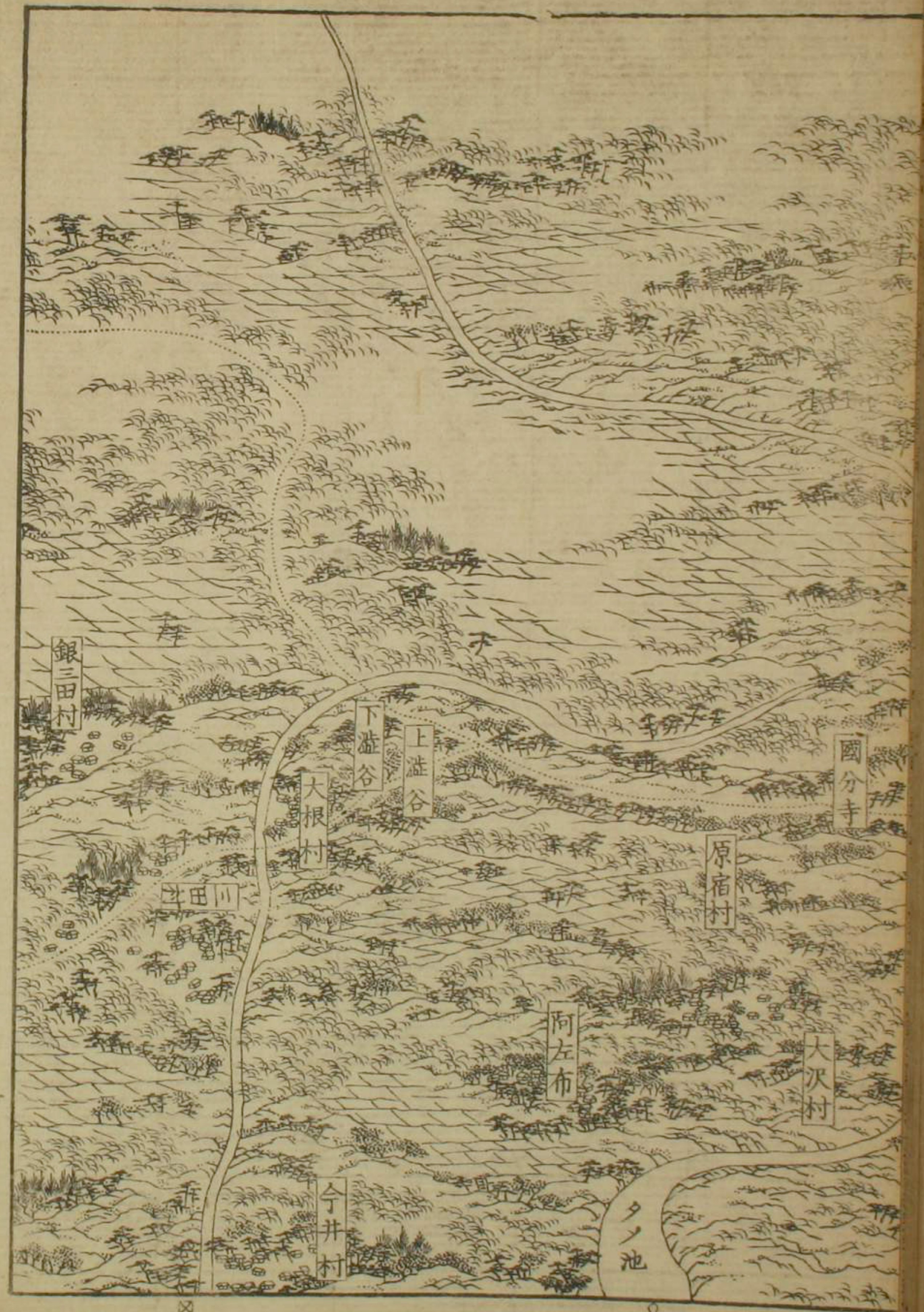
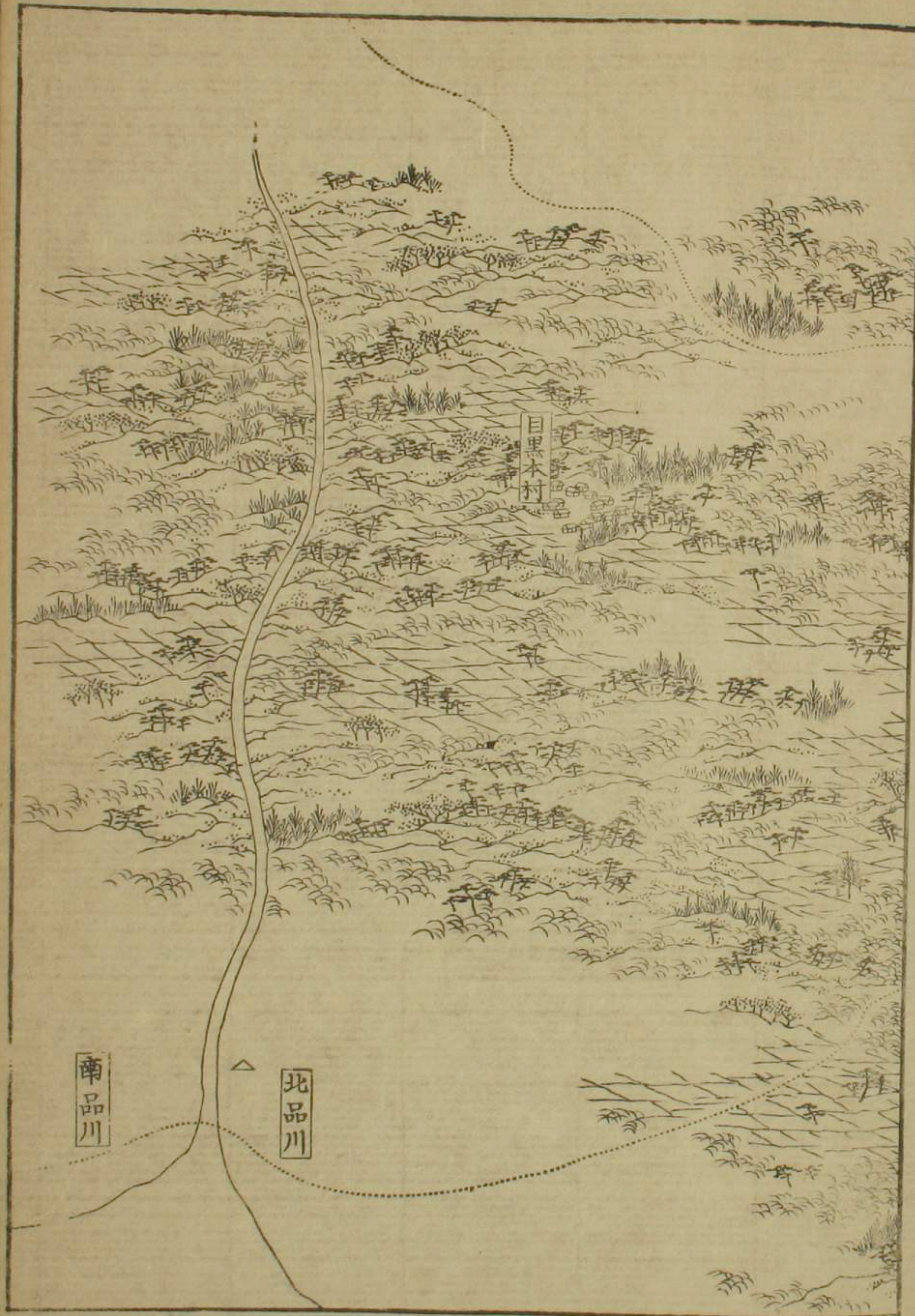




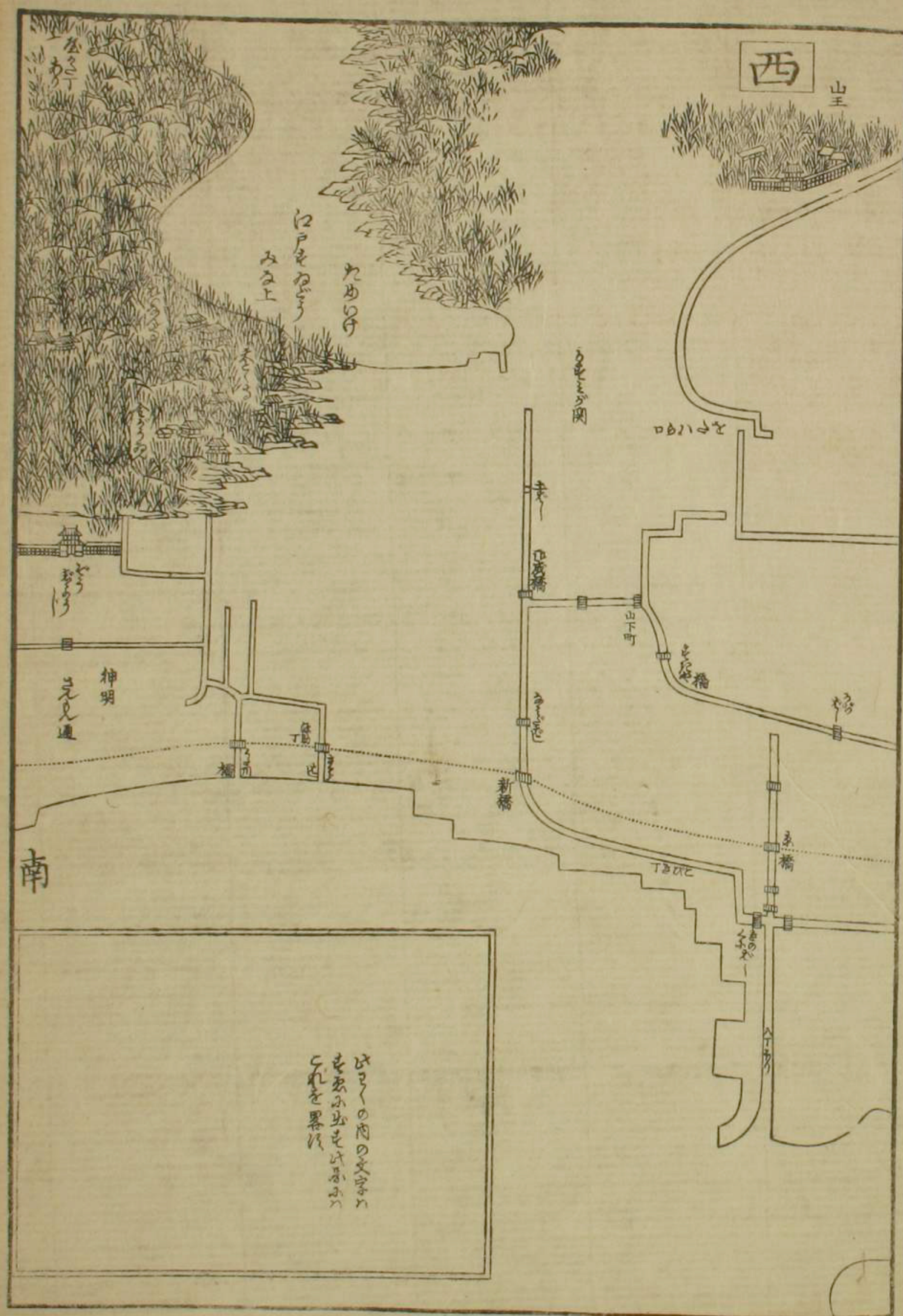
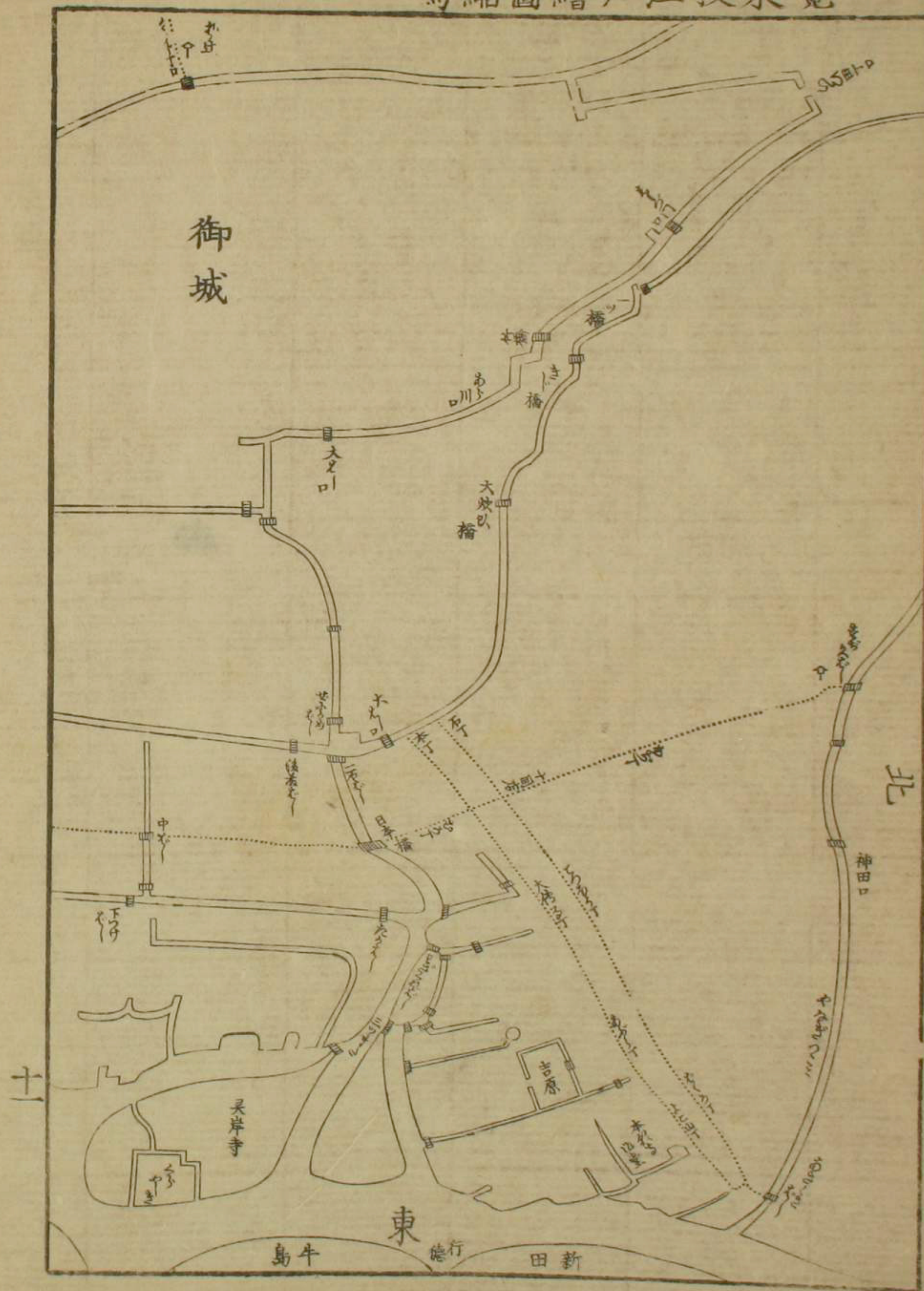


此圖の前のつたあまう巢鴨より西の方へ
 出を次へつきてある。この筋を以て
 乃とてりるとなる奥加へ下向の街道
 せんれ





寛永永板江繪圖縮寫

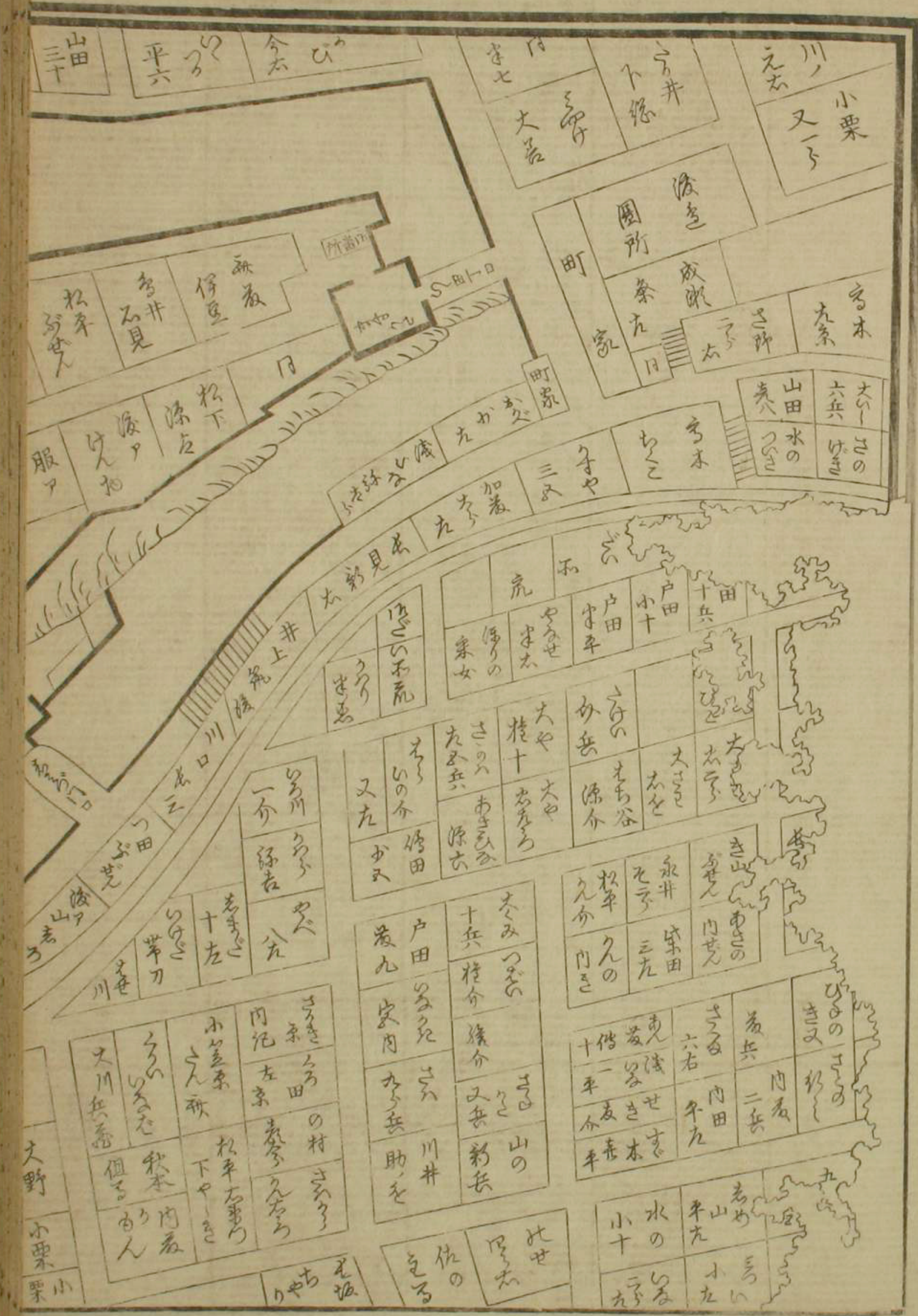


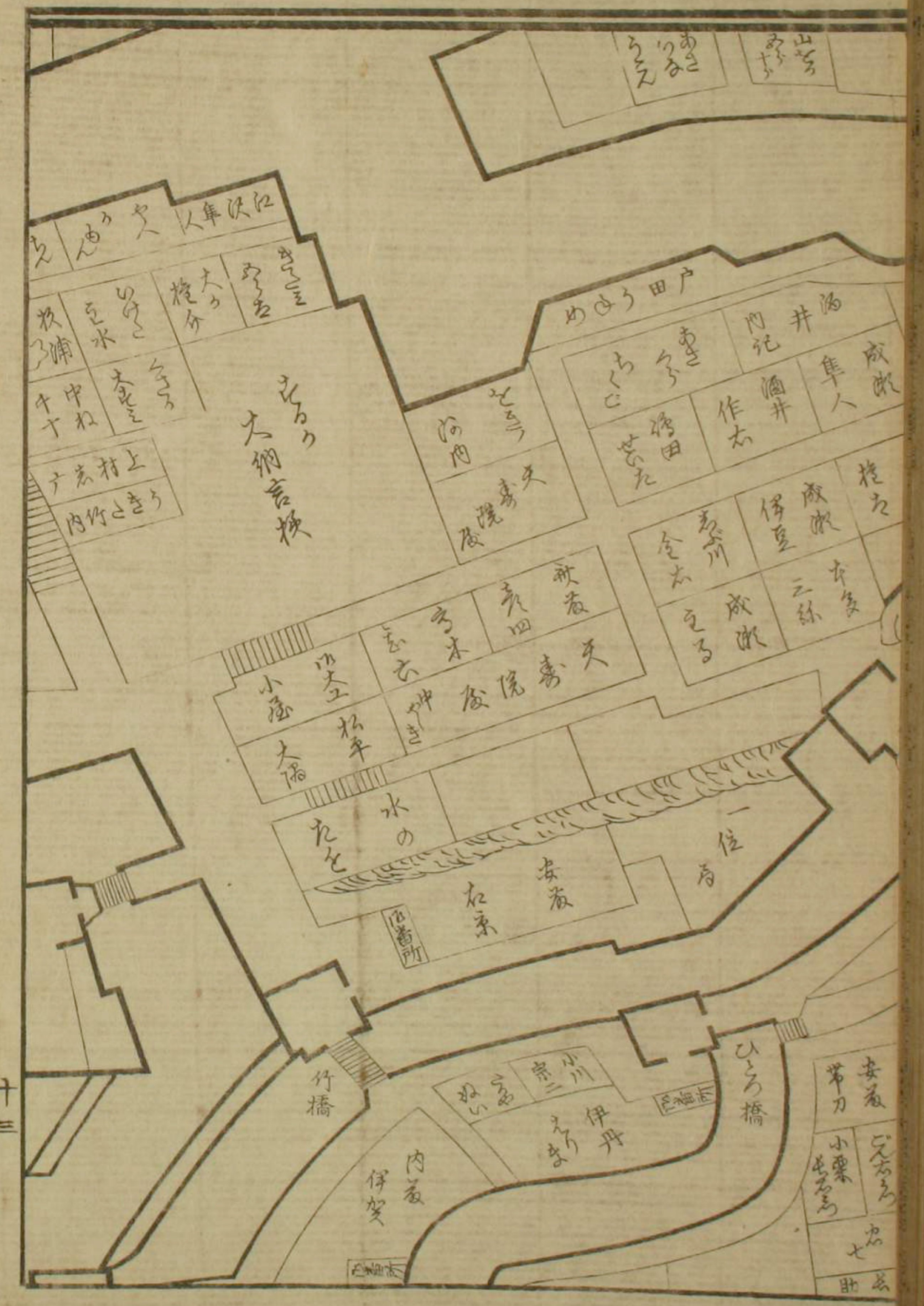
江戸の内町文字
を左に出せば
これを畧す

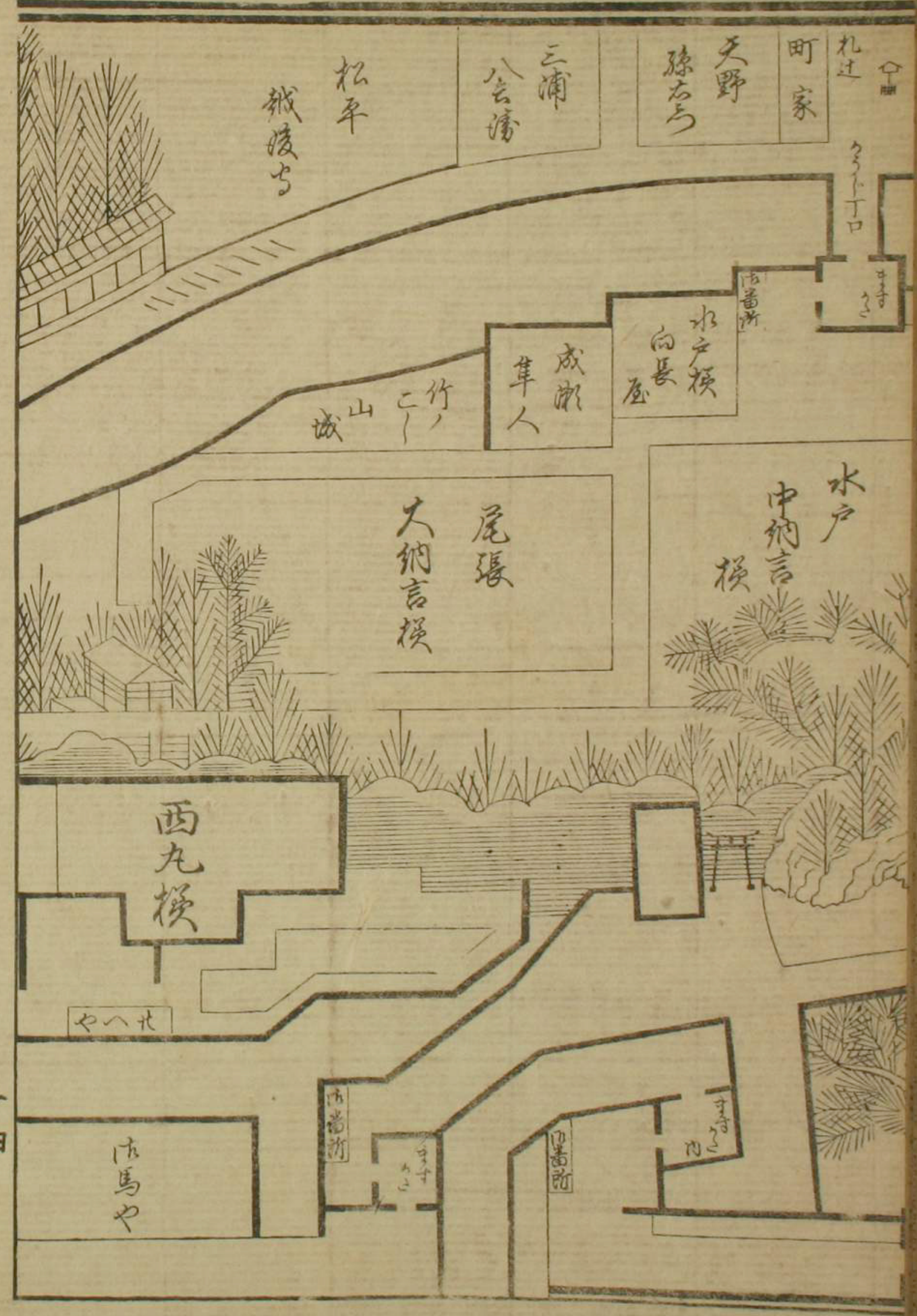
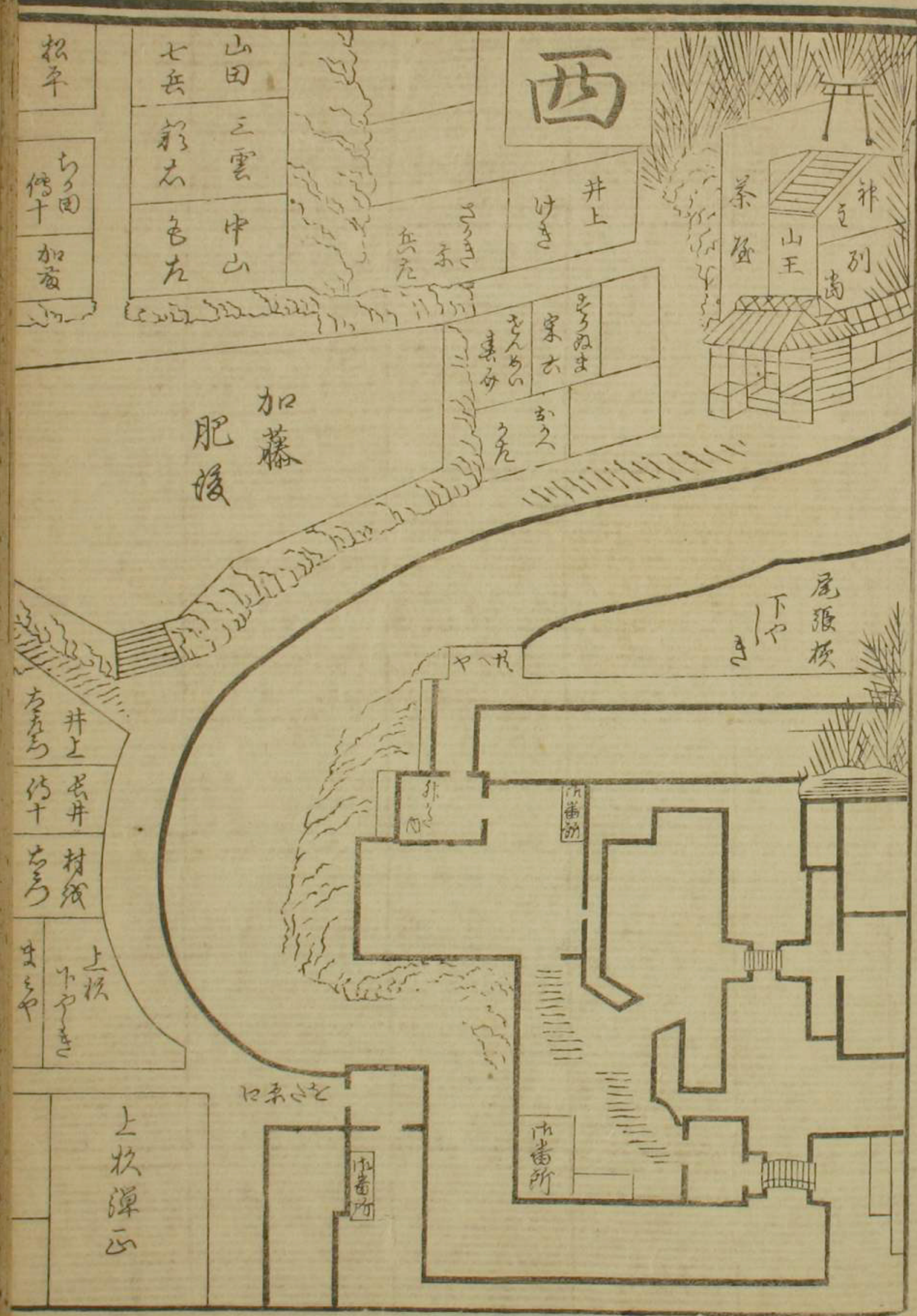
江戸繪圖梓行

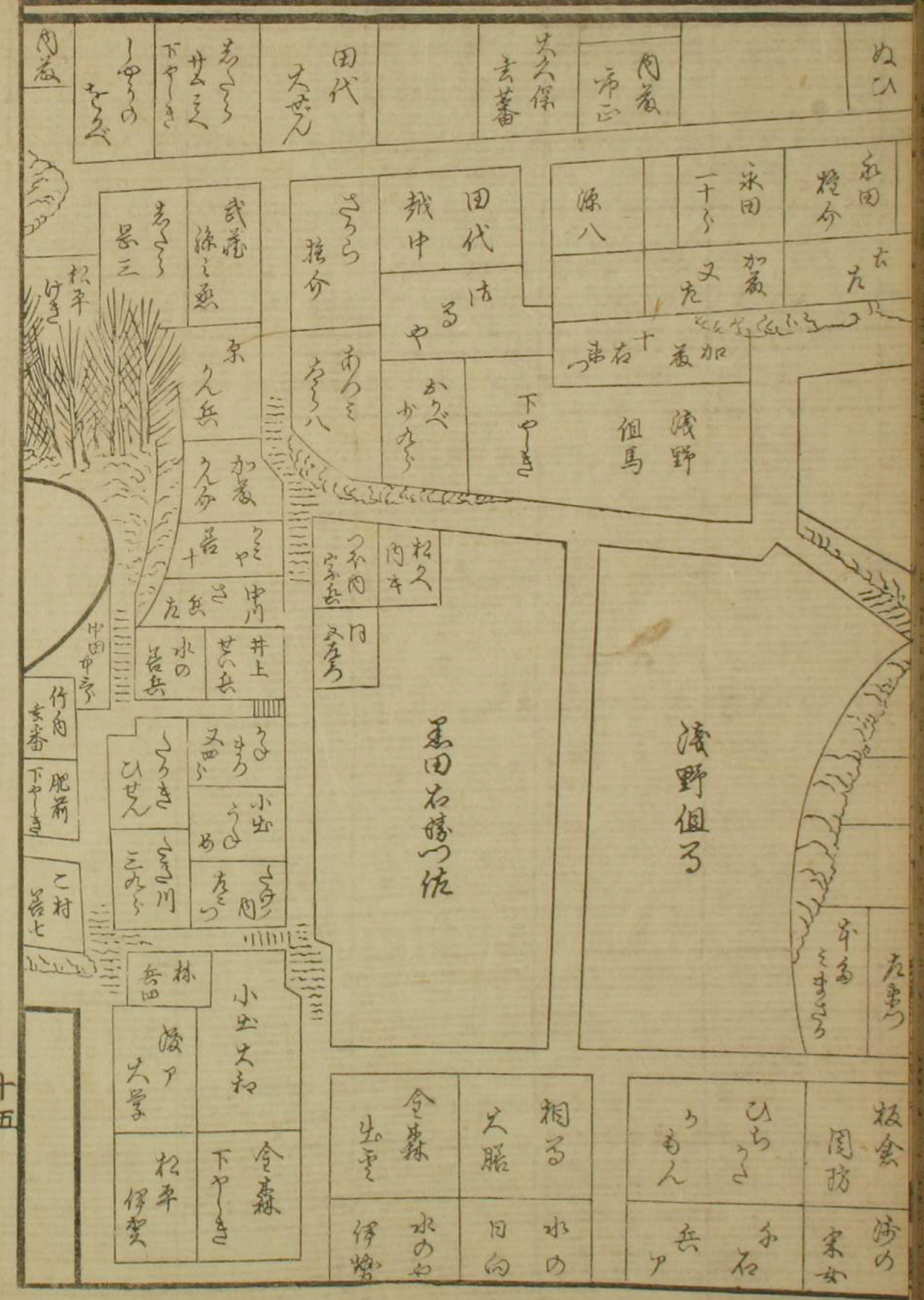
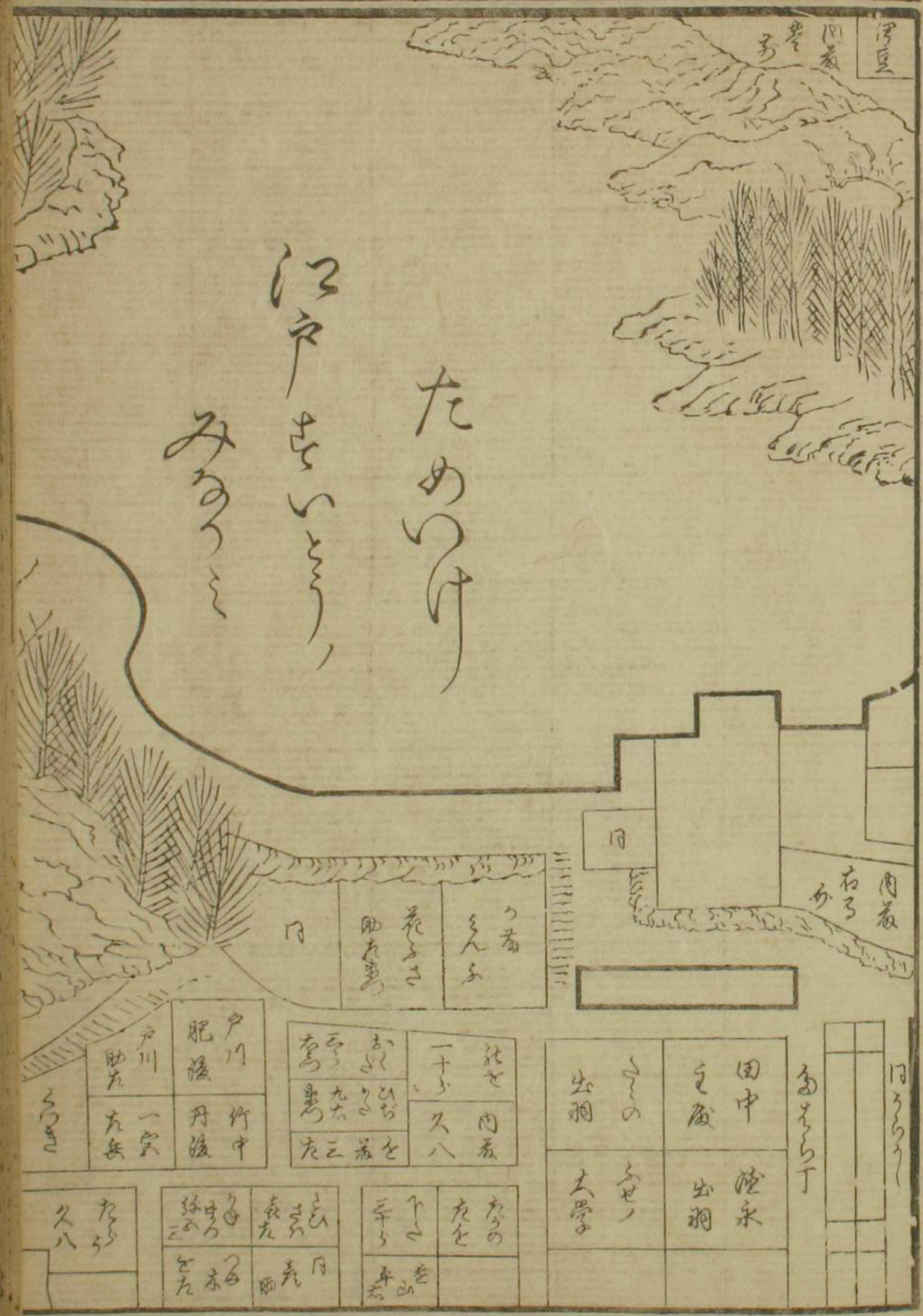
おもしろこの大江戸の地圖を板行するもの寛永の圖よりぬき
 も法傳りびかりふよ、所寛永年間の繪圖を坊間よりぬきし
 刻しなるものと見えりその遺るを近來翻刻し今も世に
 ぬきたりのするものこれありさておれより後明曆火災始ありて
 江戸一變り町も改まりて坊間の地圖を
 仰傳りぬ細
 小あつてきりり後師匠かき傳りてふりぬ右法繪圖板行し
 を死よし形ひひりり免りて下されき江
 江戸の形
 板行しりり年々板行しりり今も世に傳りて證と伝ふ乃
 事

左に載る圖を板行しりり今も世に傳りて證と伝ふ乃











屋敷町
あり

○山王社

永田馬場より祭神の近江國滋賀郡なる日吉神社と同ト

当社も八間郡川越仙波といふ所より上古仙臺仙人の住み古跡か

り慈覚大師草創ありり星野山毒量寺と号し天台宗

霊地として山王権現を勧請すその後尊海僧正中興し二十餘

院費をめぐり長祿三年太田乃権江戸城を築き居住の地となりて

のち文明年中仙波村星野山の山王を江戸へ勧請ありて江戸城の鎮守と

すその地の今紅雲山ありといひ 祭日毎年六月十五日

○神田社

湯島ふあり祭神大己貴命聖武天皇天保二年獲坐あり

往古の神田と云地一國ふ二所三所ありて大神宮へ初穂の神供を納む

當國の豊島郡芝浜村ふあり又将門の霊を合せ祭ると云 延文中

一遍上人真教坊より所より遊行のせりり村民のりりめれよりて将門の

天と地を祀り神田大明神二座とすその傍に草菴を結び芝草
道場とす今浅草なる神田山日輪寺といふ遊行者即これなり 祭日九月
十五日
○築土社 往古に田安あり今の平川江門を造り天正七年平川二の丸所
造営のりて牛込江門の月小社地の代りとして天正より二十七年とす
元和元年の頃さうひの時江用土とありて今此地はわが地とすなり 祭日
九月十五日

○飯倉社 芝あり祭神に伊勢太神宮影遷あり一條天皇寛弘二年九
月十六日に御神幣と大牙一枚地小降る人民ありとすところの七葉なる
子の兒女小託宣ありて我を伊勢西宮の神なり此地に住人とありとす
鎮坐あり其後百とせを修く建久四年源頼朝下野國那須野小發向
のりて祈禱ありて宝剣を納免千三百貫の神田とす附一とすひとれば

神徳いさし目々に奉んまうし明應のに伊勢新九郎関原に威
をうすの時當社の神領を掠めざるに神殿大破をとりとも天正所打
入以後所蒙教ありと寛永十一年再び御修造ありてより昔に所と
の靈社といわれり 祭日九月十日より廿日まで

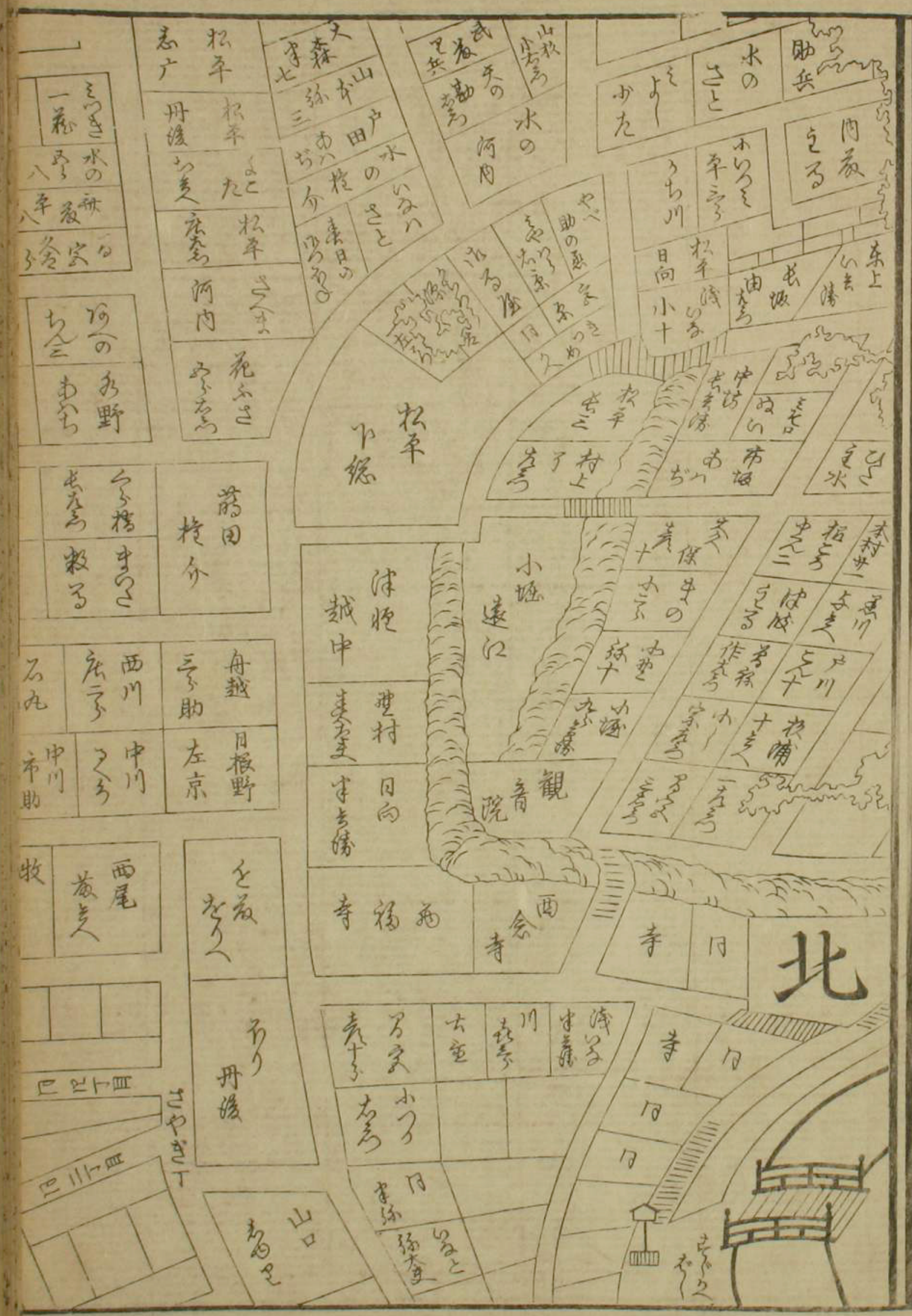
○牛御前社 本所牛島にあり祭神素盞烏尊なり清和天皇貞観二
年慈覚大師の勸誘あり牛の古前といふ牛次天皇と稻田姫古前
といふ夫婦の神とされこれを合せて神号とすなり 祭日九月十五日

○富岡八幡宮 深川にあり祭神鵜居八幡宮なり大田道灌海へ信仰
ありしにりて其後寛永元年子長感法印子靈夢の告ありて永
代島子宮社を建立し二十一年八月十五日にりて祭礼を執り
仍とる 祭日八月十五日

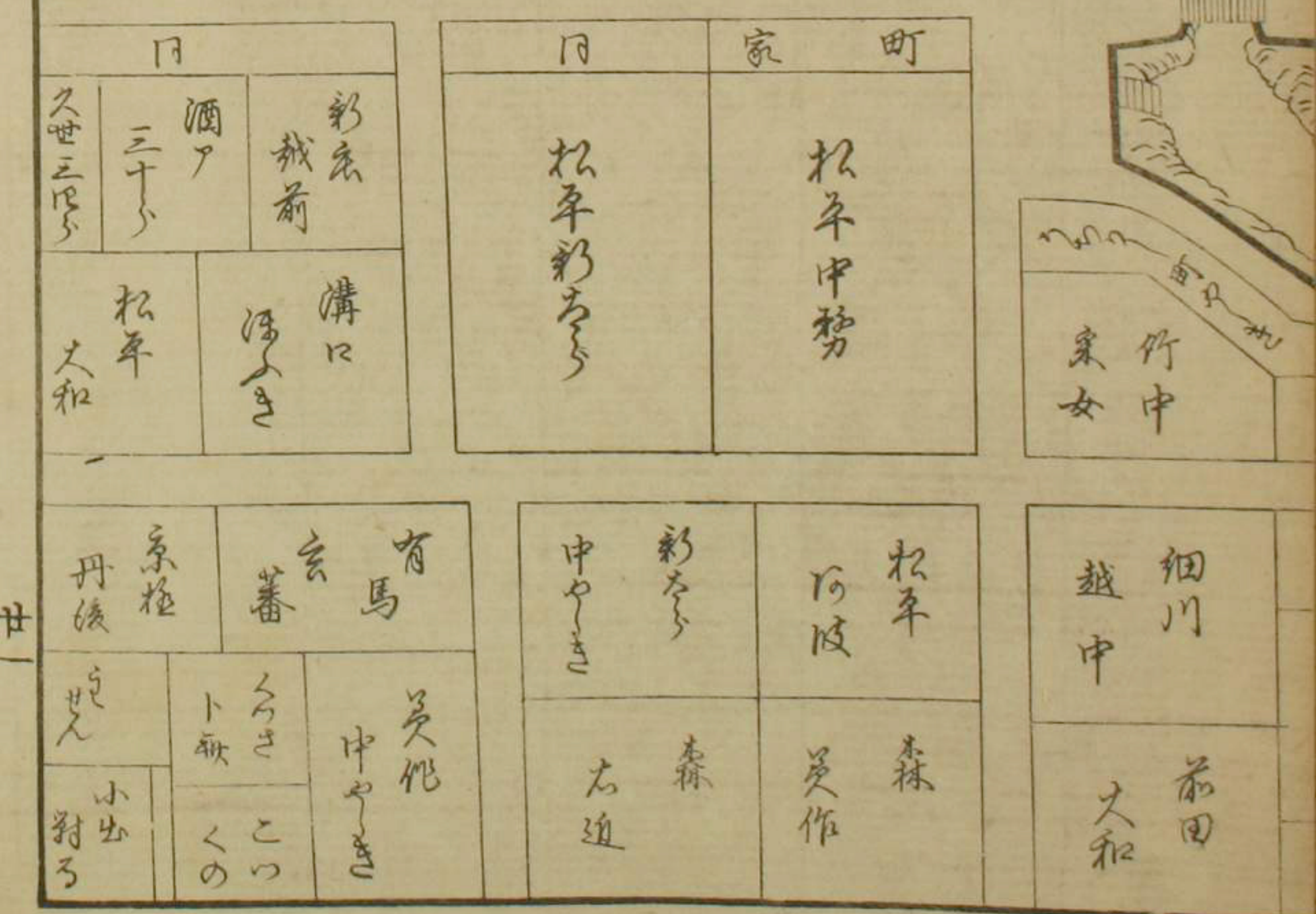
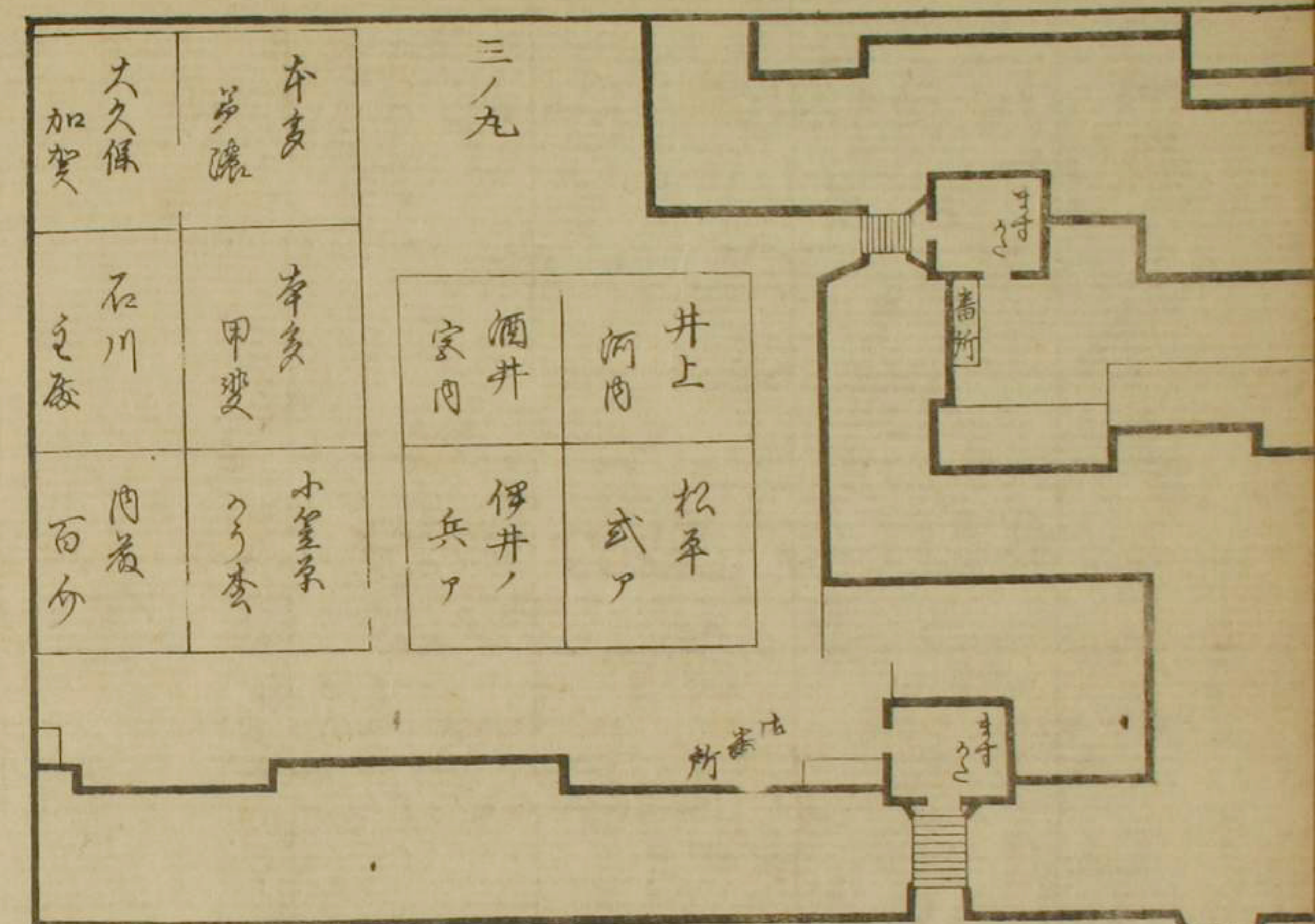
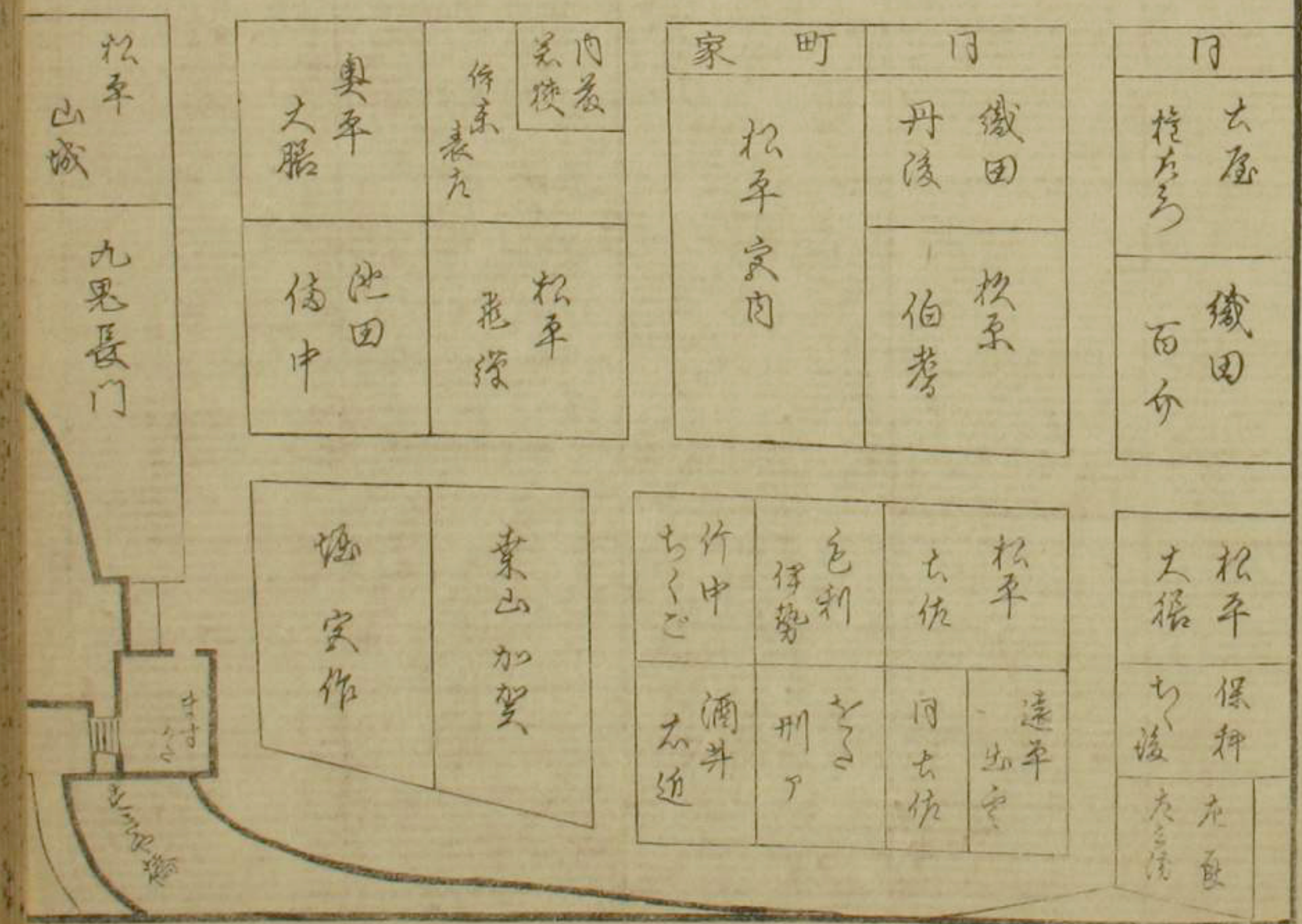
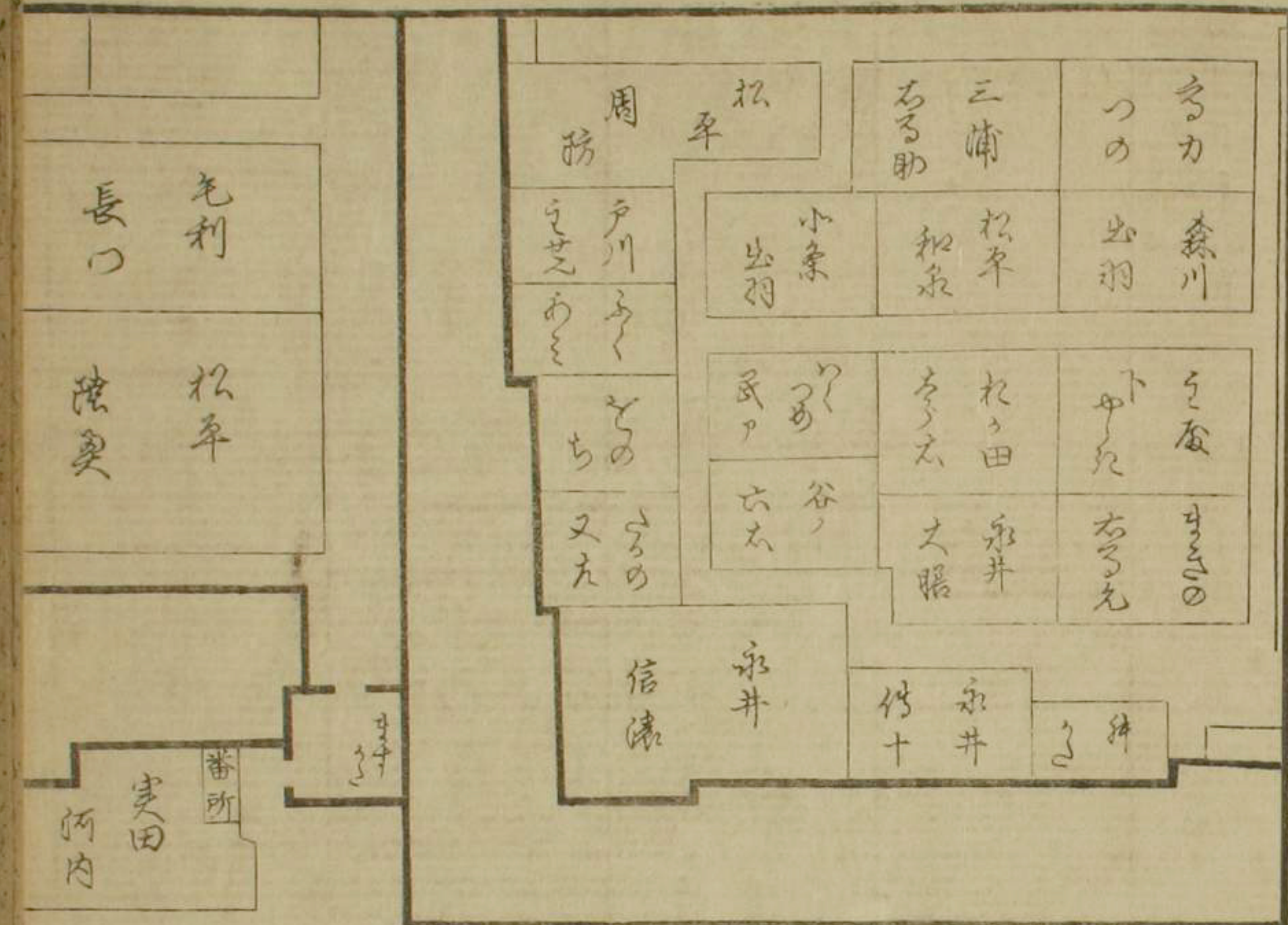
○鳥越神社 元鳥越町ふあり素神天兒屋命日有武為二重むじの
 大社とて境内も廣うりて正保二年は用地とありて其の代地と出
 谷町とて下さる今その所は社ありて新鳥越といふ其時の社家のぬが
 ひふりてりこの社地も神社とてこれをうりて元鳥越といふと
 うり 祭日六月九日

○王子神社 王子村より祭神熊野三所あり若一王子の天照大神ふ
 てこれ新宮より文龜元年當社建立あり後寛永十一年嚴命り
 となりて浙造管ありこの時浙儒者林羅山命を蒙り縁起せうりて
 宝前よりとて毎年七月十二日田樂躍あり寺中十二坊よりこれを
 延とむ泰清の若紙細工の繪と納めをさありて受てり魔除
 とすは神事と俗に繪をりといり

○金龍山淺草寺 當寺觀世音菩薩の尊像ハ推古天皇此御宇
 土師真人中知といふ都人故ありて都を立出て此武蔵野に來りり
 その臣檜熊渡成武成といふ二人の兄弟跡を慕ひてもれきたり宮戸
 川今の所の邊りふ仮住居しり三人とも漁りを業として年月を送
 られり元よりゆき身にわく杯を魚鱗の命をたりに世を渡り
 奉て憂ひ觀世音の群品を倚て一皆苦痛をいごす先あると
 の形より大慈悲の力とてこれをりゆる魚類の生をてんぞ我未
 が罪もゆるせぬと一人不乱に觀世音の法名を唱へつらたいと
 形とてとありふるさればよや同帝の三十六年戊子の二月十八日
 三人の漁夫宮戸川の流に網をかりをれあやしまりのかきり月
 うけふる思ひ不思議や觀世音の美像ありやて草を結び



此像を安置すその翌日をもちて草刈りしる十人つけまじ
 朝とく草を刈り出るに草の中より光明がやれりこれバ
 うち驚きたるに大悲の神像ありて其所三人の若衆にて
 あるべのうへに物持りかめく奇異の事ひては「藤を柱じて
 假の草堂を造りてそとより其の地今の一と権現の所より藤
 せりてつるににより藤堂といふを後よりあやまりて何ん堂と
 いり此三人の源史を祀りて三社権現とあやめ草刈り十人を祀り
 て十社権現といふ其子孫今亦あり昔よりこの浅草寺へ参詣の
 衆集あること他よその類ひかへ今北河堂の古造堂の寛永年
 中の御建立てて社殿を二の霊場より推古天皇二十六年より
 嘉永五年までおとそ一千二百十六年子ありり

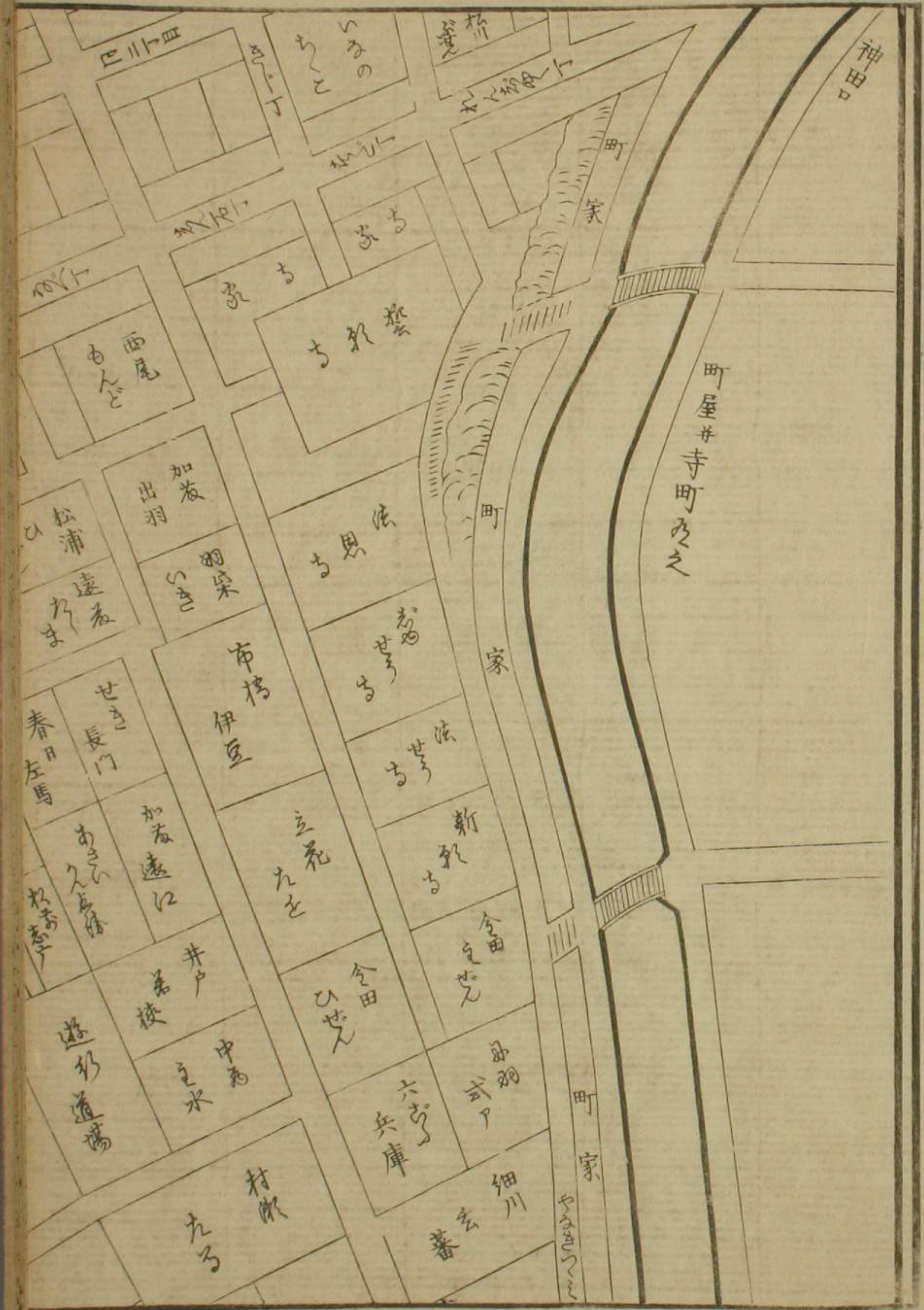


都幾川押色川といひ入間新堂のつひどひさし入間川新川岸と
いふも同く荒川は合さるるなりこれ今も隅田川の源流大畧々此
如く又元荒川といふありされも中古の川筋あり故に元荒川といふ
大里郡熊谷宿の西より流れ埼玉是之郡の南を流るこれを後瀬川
とも云流流を精しくいふんと事長くれがながくはるは畧々右に
いふ所の元荒川といふ所の即古隅田川より源は秋父は葦すといふも
入間川ありといひ利根川は合する右に判官物語より利根原の上野より流
ることもいふ

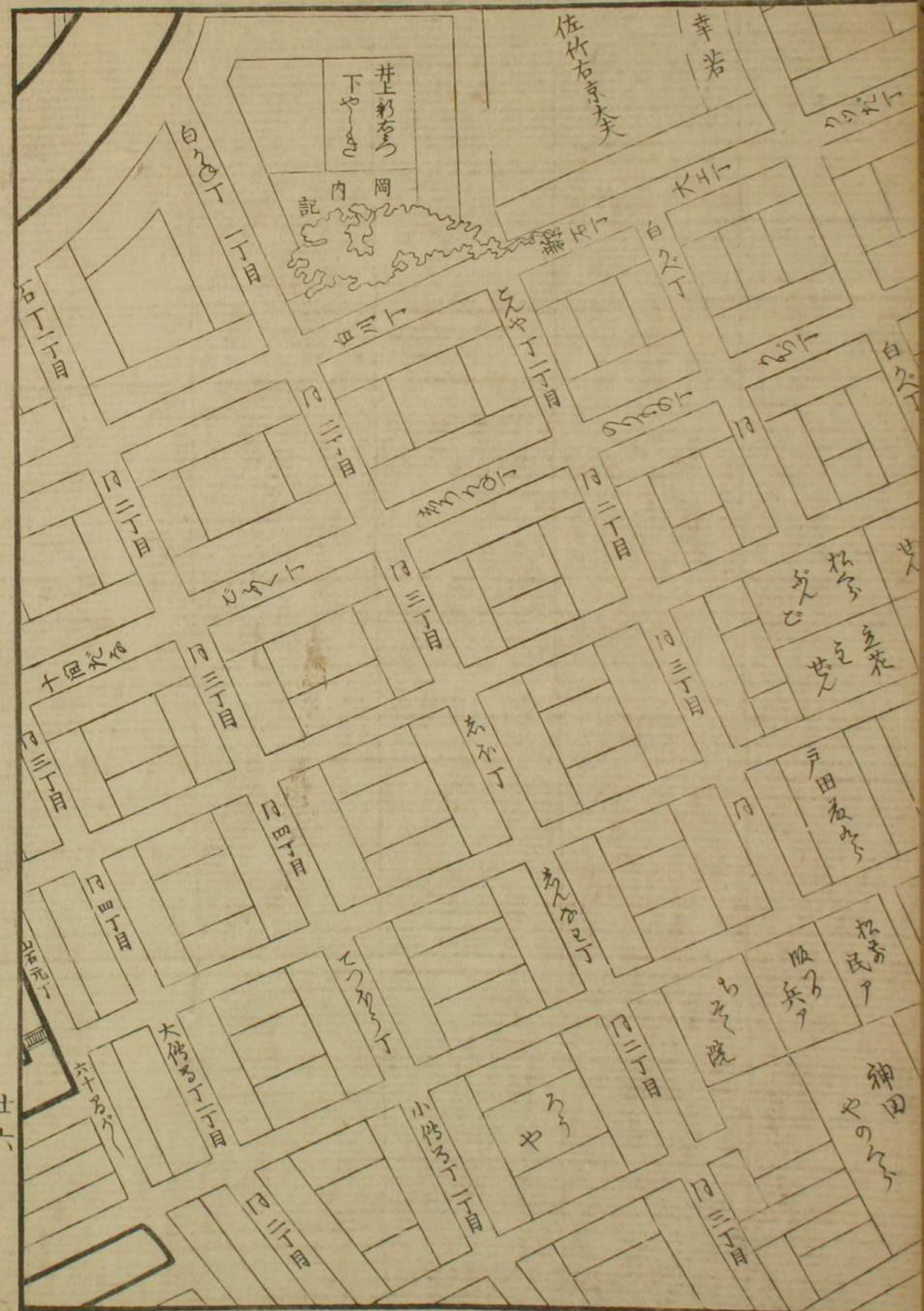
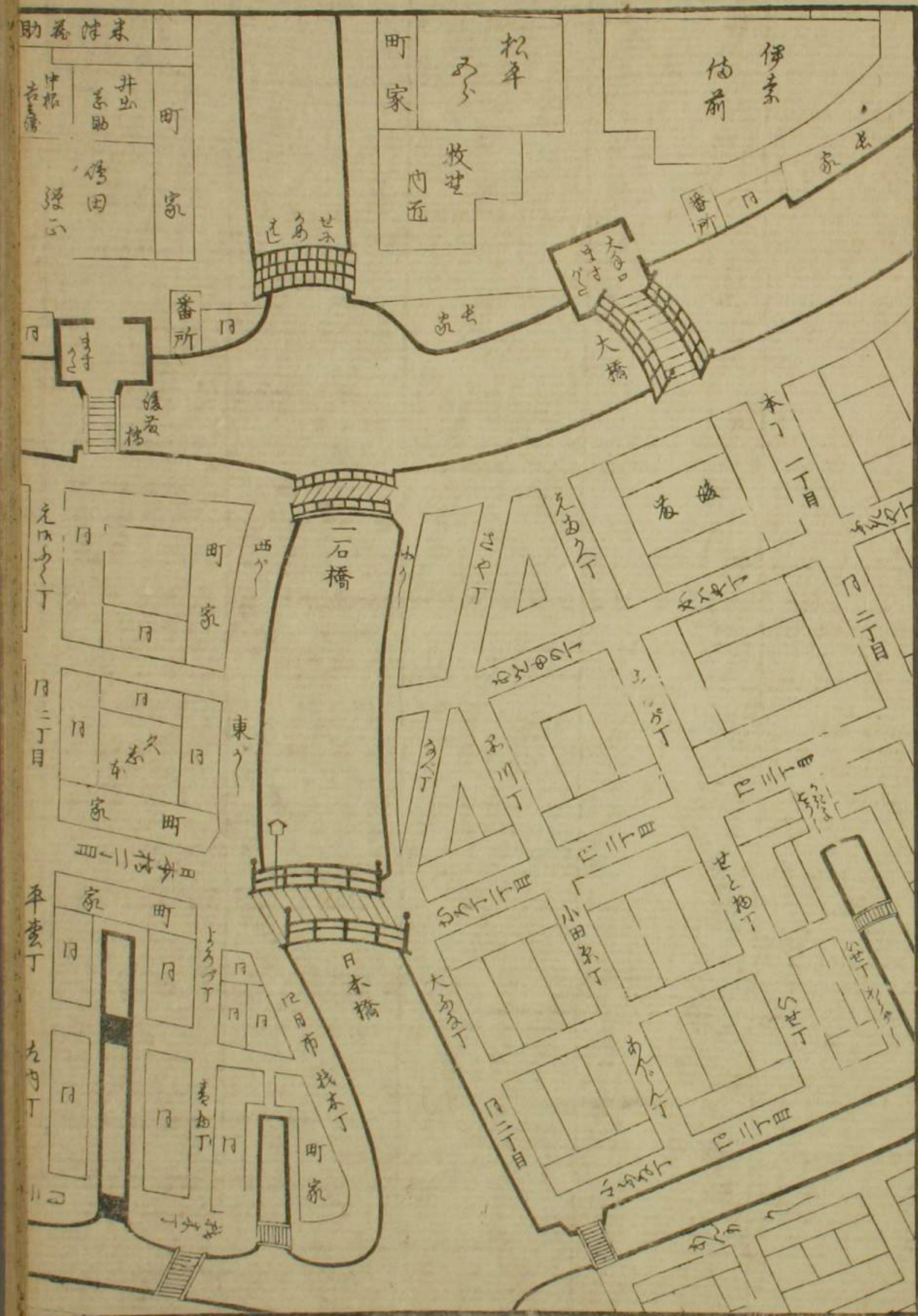
梅若塚 梅柳の隅田院本母さよわり奉堂のころに柳を植ふる古
墳あり昔の柳の枯きを株のそけり今も若木の柳をやく已に大樹
ありこの梅若丸の事跡いふにさ書はあつてさるるのうに隅田川

の謡曲よえゆるが始末なるべしあれども塚の古よりありしうら
太田道灌の愛しなる藤桶茶里といふ禪僧の文明十七年の記
る梅花を盡蕪といふ記は南田河邊有柳樹蓋吉田之子梅若丸
墓所也其母北白河人といふなり聖護院道真准后の文明十八年の
紀行回國雜記といふるのみ

吉塚のうけ初めはすさ川さへ後りてもぬき袖の如
といふおもひありさるるの梅若丸が事ハ謡曲はかゝり何くいふある
人をも父の名字をも國をも名もなれが我も都北白河は吉田
ハ何某とやす人の唯獨りの子あり父ハいやくはれ母なるは
おひまわらせりありし人商人よりとさされてあつて成りし都
乃人の足さうけもあつてさるるの及れはわたりた藝こめてあつて



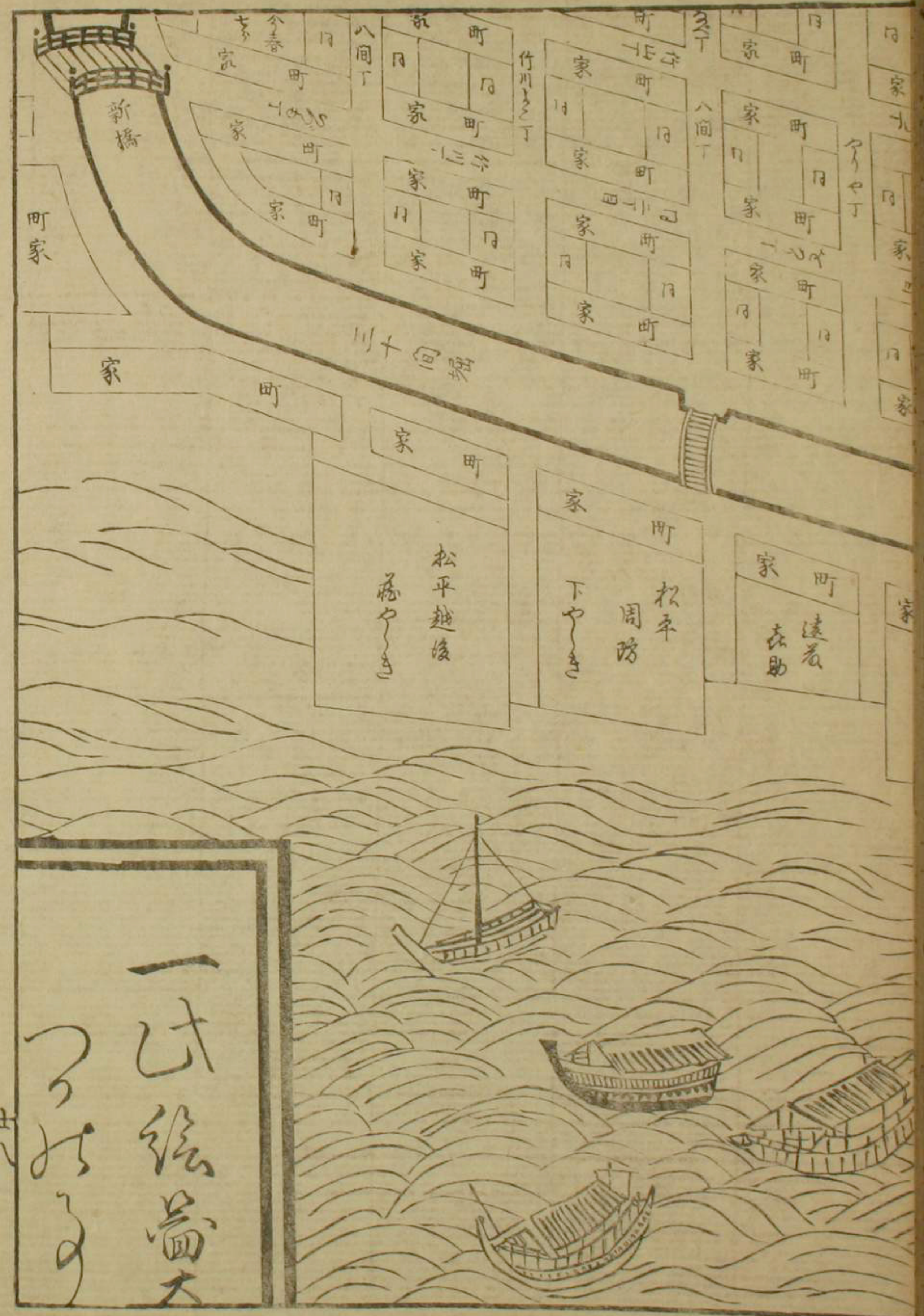
柳をうゑておられとせとてか〜やまのいひ〜念併四五編とて人終り
 して〜これれ去年二月今日の日事あり母とておれお見の年とて
 七ハ十二歳ありおれ名ハといが梅若丸と云とてハおれ稚子とて
 此物ぐらひが病ぬる子とて〜とてハおれの謡ハ觀世の先祖結崎
 十郎泰元雅といふ人の他つらといひ侍〜とてハ長祿三年ハ六十六
 歳とて没〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜
 やまのりか〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜
 信〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜
 よ〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜とてハ侍〜
 隅田堤花さうりの清諸人羣集〜二月十五日とて忘日の〜とてハ侍〜
 といひて終り



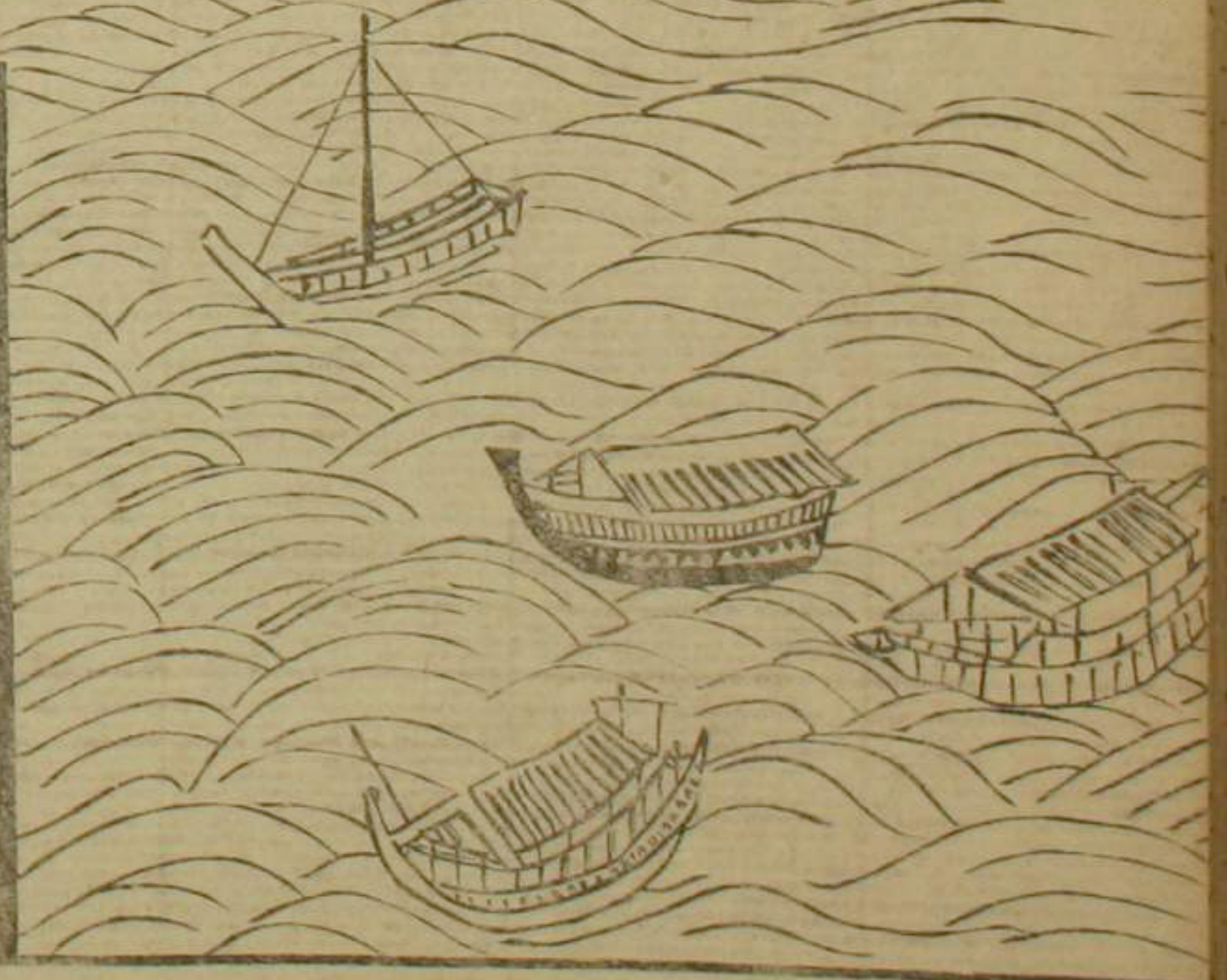


御たえ

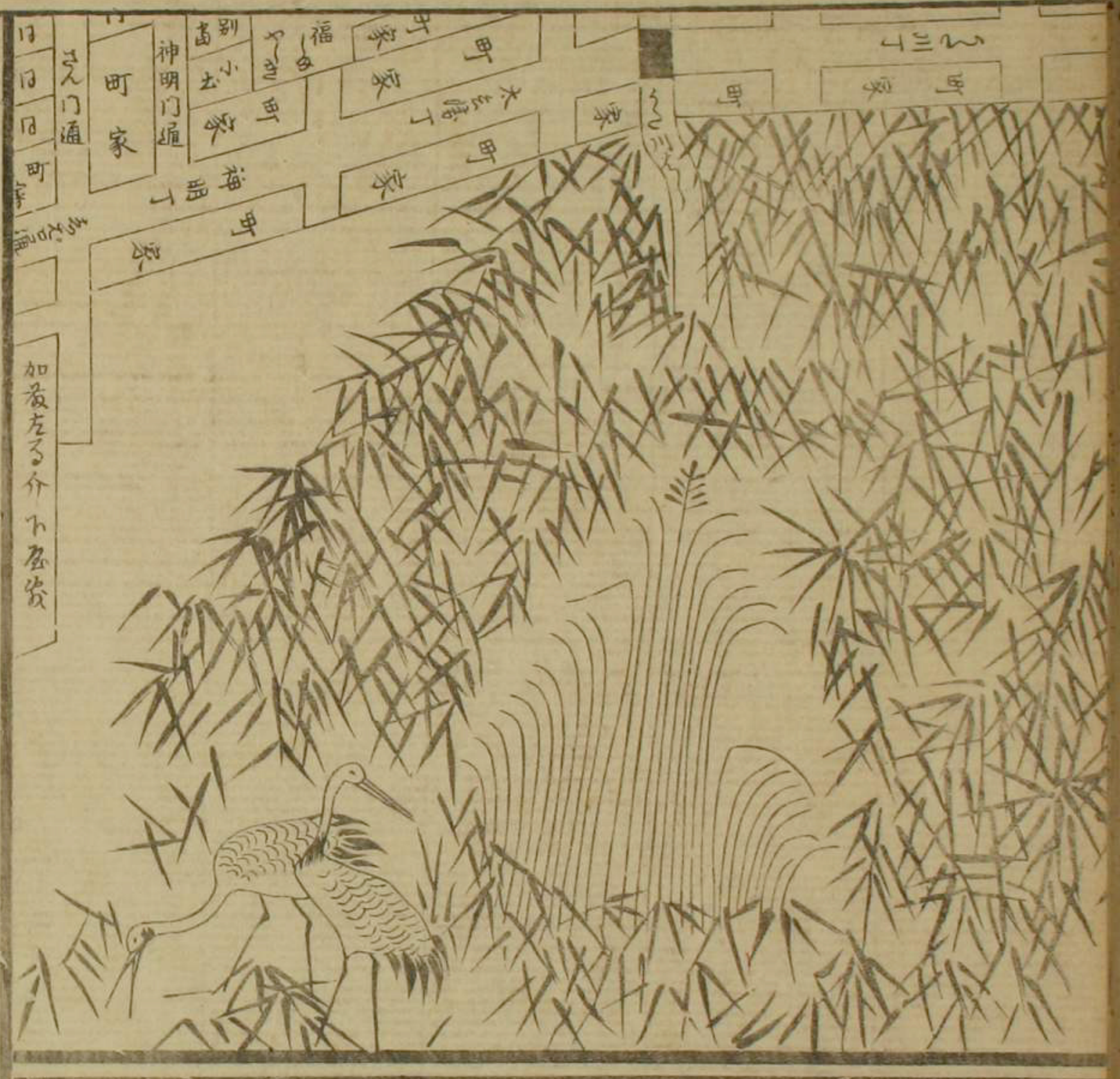
一 東のせん志
 のちまの
 奥州海道
 一 南の志を志
 法々々也



一 松平越後
 藤ヶさき



廿



一西一の町
 片、道、日
 たち、は、く
 一水、新、田、板
 右、の、道、は、く
 作、備、及、賢

如左る介下登安

日本橋 長さ二十八間あり大江戸の中央にて諸方の名法この橋を

元と凡水の橋造室町を丁目ありこの西側を尾店といふこれ尾崎屋と

いふ若の相形やきもあつた東の方北河原に本船町あり肴店よき

海物魚市立つ

一石橋 日本橋より二丁やど西よりこの橋の南は呉服後藤北は

金屋後あるゆゑに後藤を秀白の南あも五斗おも五斗との間片

河を二石橋といふとわたり又一名を八橋といふ此を橋を講の橋と見え

えり此橋とも八もある故といひその七は日本橋 江戸橋 呉服橋 船

治橋 鈔籠橋 道三橋 業繁橋 あり

親仁橋 寛永五年十一月彦目甚右衛門と云者かちなる橋あり

らの甚右衛門といふと小田原の倭人あき古京岡茂の影人あり此は新

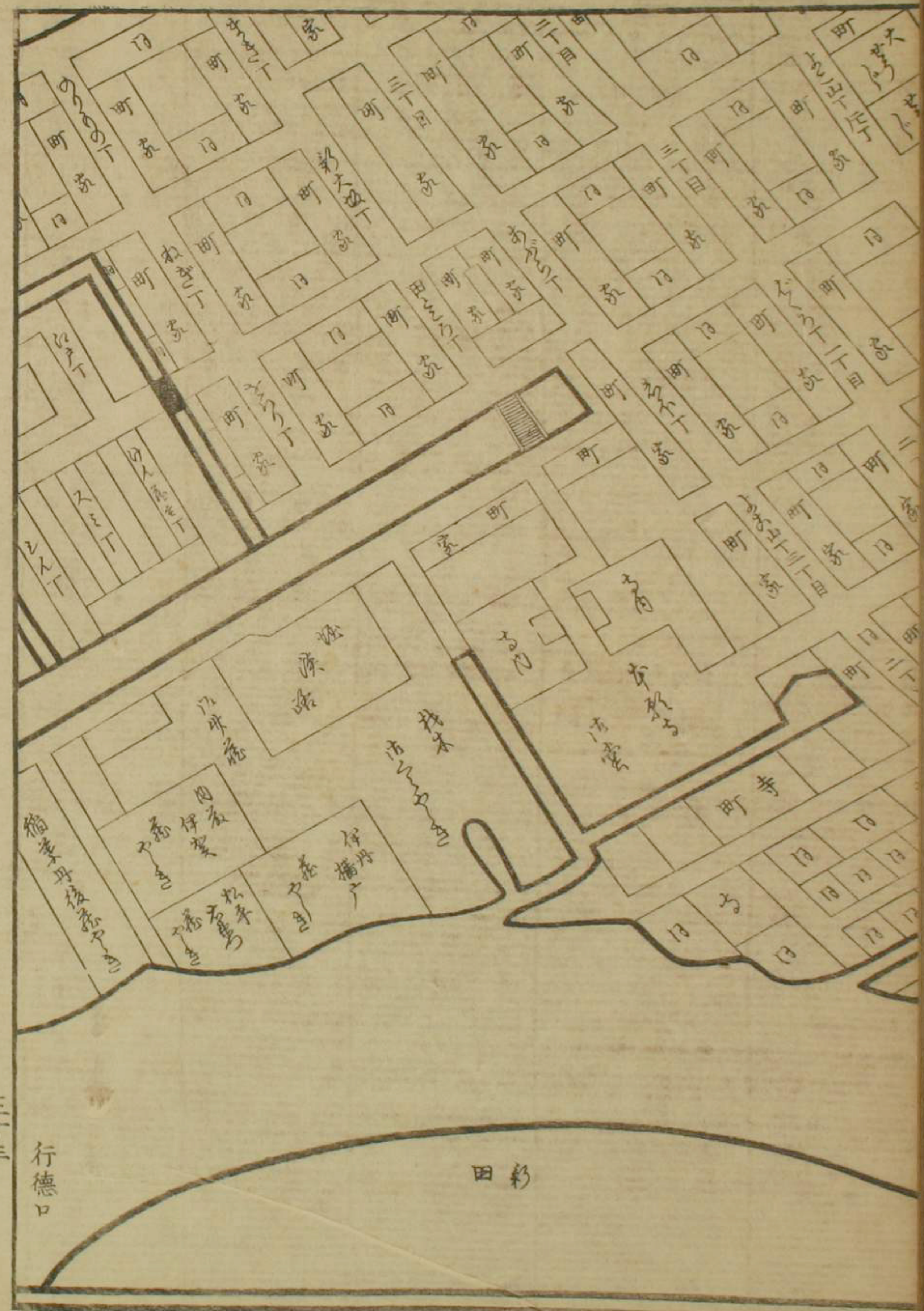
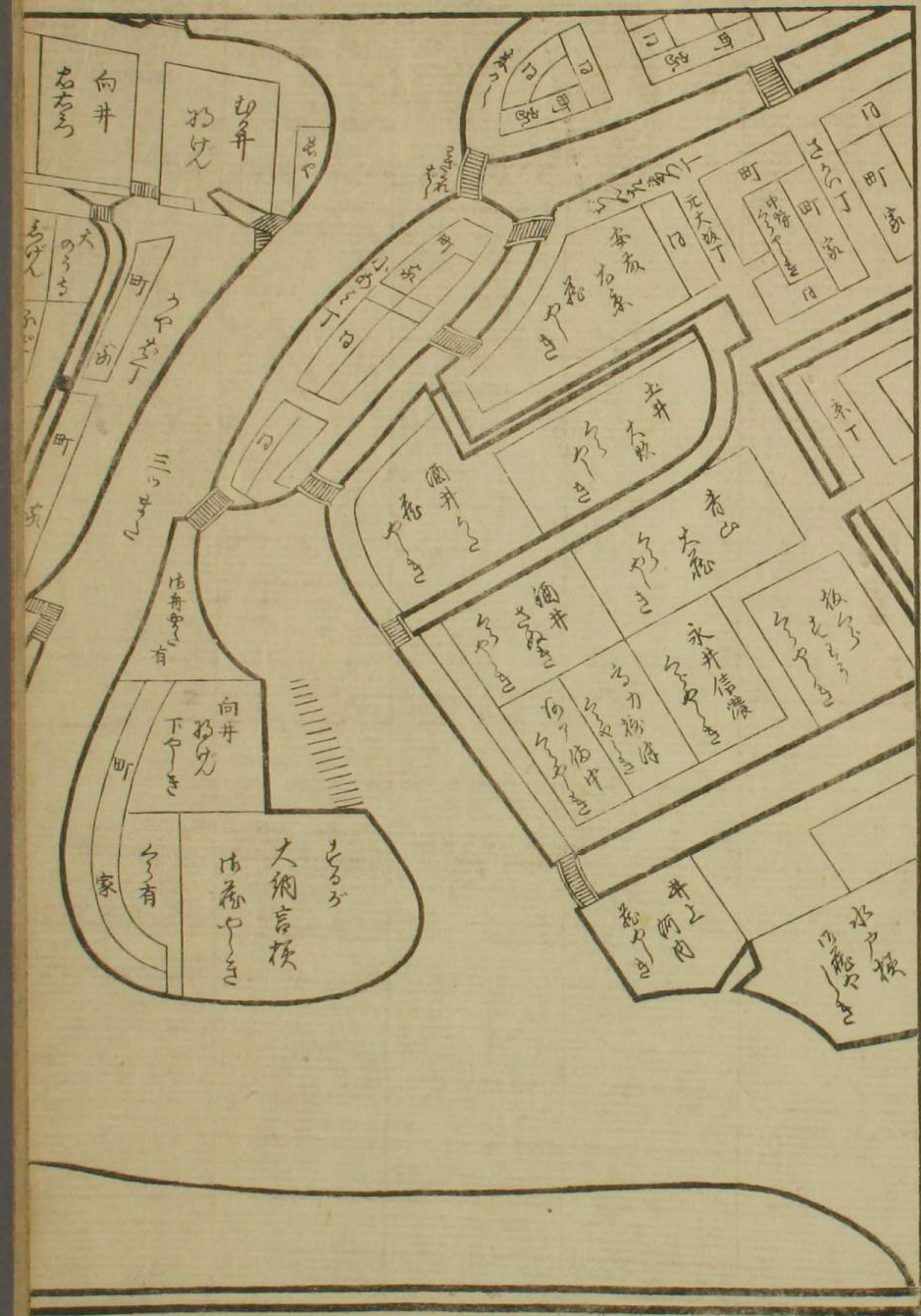
官府もても甚右衛門の事をおやらくと呼ばせりしやどれ世の人
おやらくと云いしを甚右衛門が事ありと云あやうにありて、何れの人よ
てれくかかぬ甚右衛門が事ある橋本よかやど橋本名付しと云
芝居 教養妓二座稱置町子猿若助三郎首座町子市村竹と無名
大昔の芝居町子あり大の時を過ぎ芝居をて後子中橋よ芝居立つ以時
びしりものうと云い出来て今の宮芝居のうとありて、後稱置町子
依り又今の場所よりある助三郎の寛永元年は秋若助芝居を
稱置ひく始めに中橋よある元祖助三郎の猿若助上手小うとの
名人より寛永九年阿宅丸と云船伊豆より江戸へ取寄るあり
助三郎舟の船先よある音頭をとりしとありこれより
津城へ召こせしれ、甚右衛門と云いし島目うと云いし金襴の猿若
衣

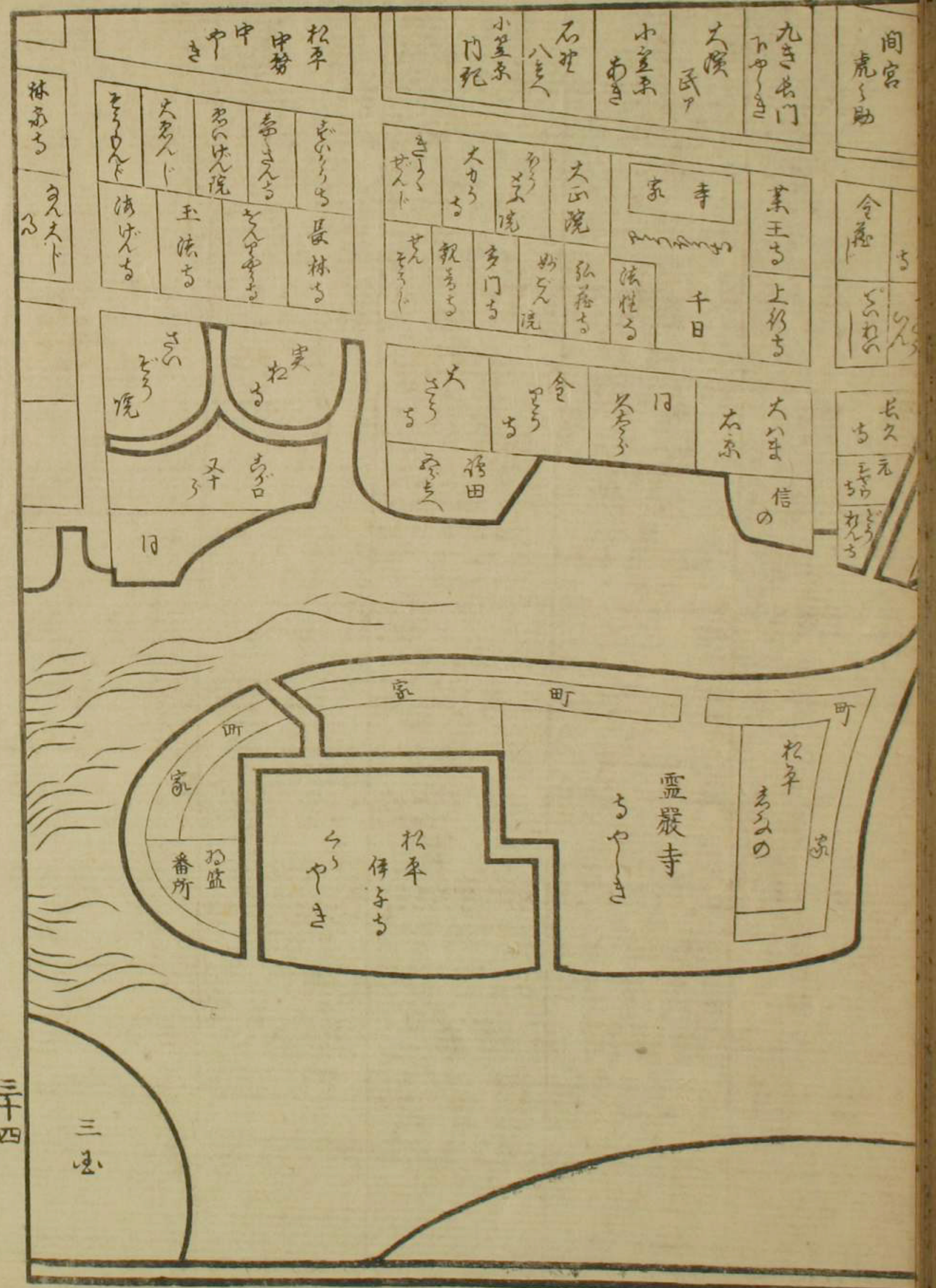
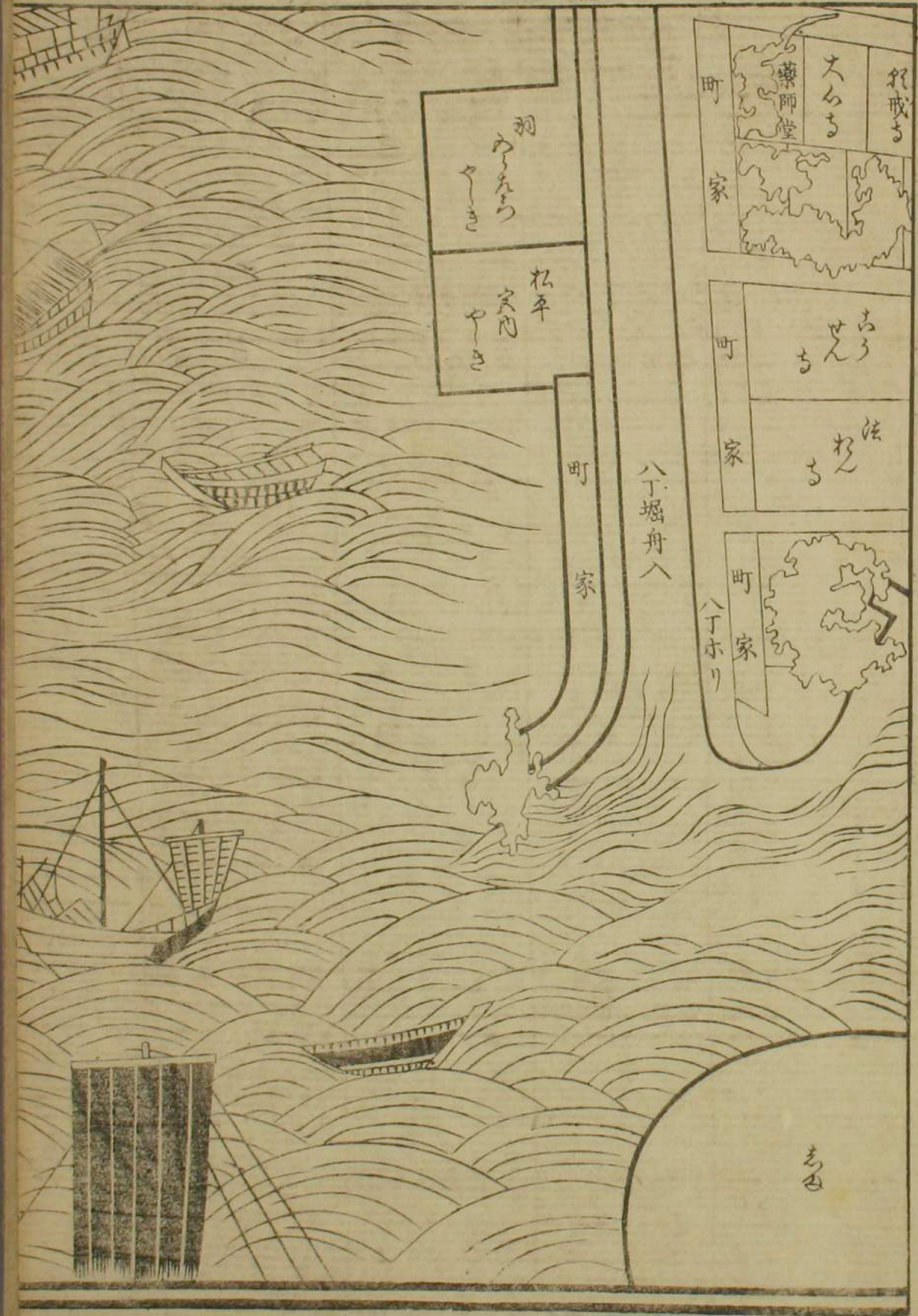
装を以て戴く今子猿若助中の宝物として壽狂言ある時、甚右衛門
枝露とあるとあり市村竹と無名芝居の寛永十年村山又三郎猿若助
建つとの又三郎の泉州場のおりしと云いしと云いし猿若助小の名人あり
以の舞をとりしと云いしと云いしと云いし寛文の以右近源左衛門と云女形
上方よりよめ座へ入りて二番續三番續の狂言を仕出し
靈巖島 檀蓮社雄登靈巖寺よ入る江戸をくは大伽藍を建立せ
んとて寛永の初め海江を築立て梵刹を造りて靈巖寺と号し
その高をもとて江戸中島といひしが後子の靈巖寺と云り明暦
火災の後寺を海江よりうつされて移らば町屋とあり元十八所古来
よりあり幕の町の中五町とあり

佃島 石川島はふるびれどもある島あり、穠師の住り

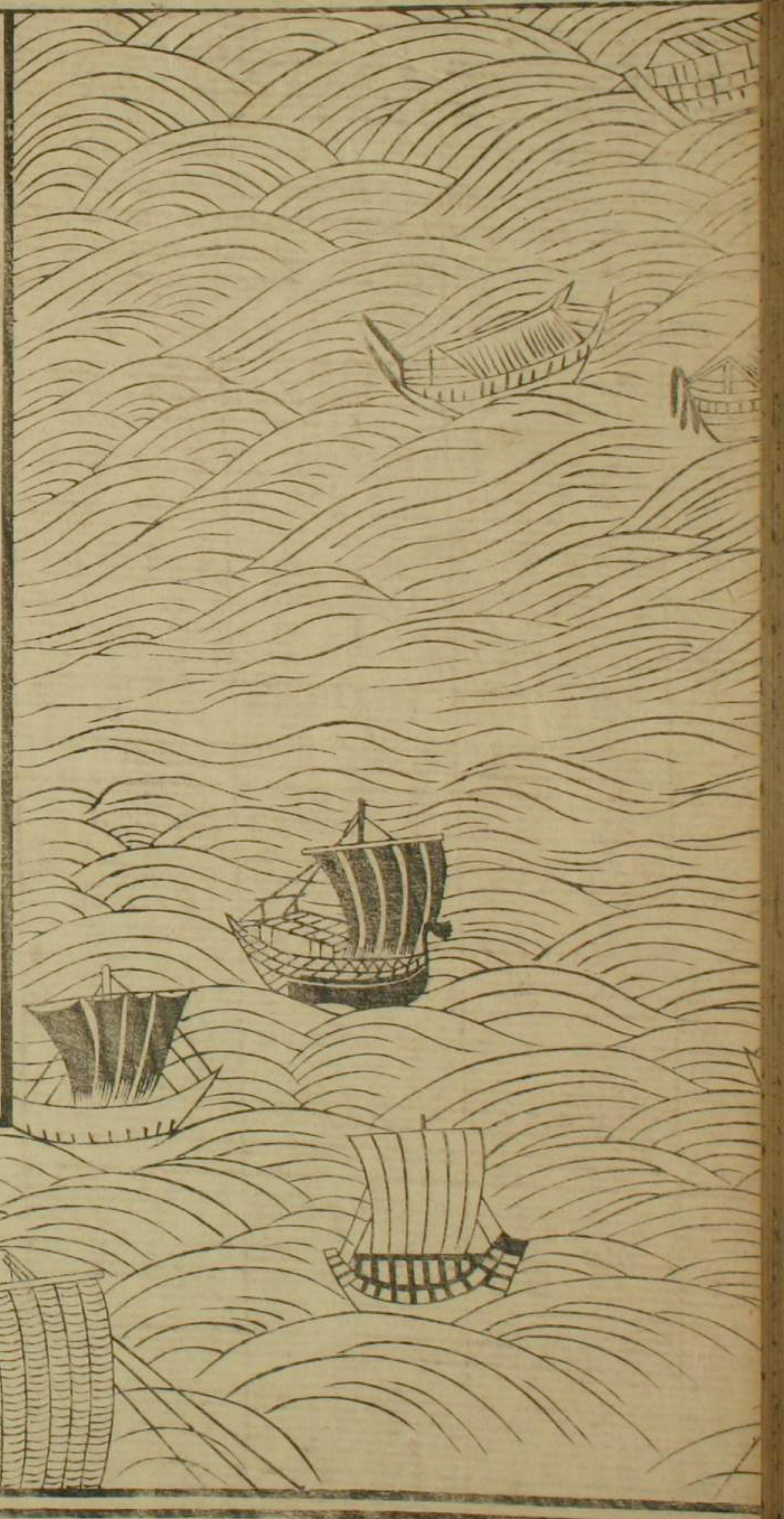
むう一物傳國傳の権師拜師すといつう今に沖懸の魚を捕るこ
りりとに白魚の名あるところ後之三國島にうつりぬあつて沖懸と
いふ意あらんらこの島に住吉神社を祀するもこの島は老を捨
おの者なれば鶴守に住吉を勧誘しつるありて
八代洲河岸 和国倉門より馬場先の内懸をさせりつうむう
ら法とらるに町屋ありつうり慶長年間異國人ヤンヨウス。ハチ
クワシるどりつる若返り末て江戸の中よるんせをわく一蠻物を高ひ
とたつて一物にわくつて沖免ありて此所よおきつて町やつきと
下されつうりて治容子河岸と書つて今八代洲河岸といふハチ
クワシる下されつる町やも直よその名を町名とつて八官町とよぶ
やアインジンを名もその以見世をわくつて魚をさしひつるが持つぬ

居住の地もやぐてその名をよびつう即今の安針町より島わたぬの
住のりいこのいぢれあり
待乳山 當山の森はむう一沖より入津の船は目わたるが前の牛
馬のうよひはありて奥の物に往還するつうり一河原川山の腰を免
つうてとつてにるがめつた純景の地ありむう一藤原末主の島あり
あり一むう一山に地をもち安明神あり池中の糸天の船船乃
藤原中政の子の前の不持と云ふ本社を祭つるところに聖天宮ハ奇抜別當
実盛信仰やとつりあつれども社傳の久月元年の勅書といふ
戸田恭光入道茂睡が建つところの碑やよあり
ありれつうりつうりつうりつうりつうりつうりつうりつうりつうりつうり
られハ新勅撰集に載る弁基法師の事よ





此の外の西南に徳侍の
 船はあつた



一、此の外の西南に徳侍の
 船はあつた
 此の外の西南に徳侍の
 船はあつた
 此の外の西南に徳侍の
 船はあつた
 此の外の西南に徳侍の
 船はあつた



きたる小路所口むきくはる多
 本橋より同本道三十七分り
 く是れ水田海なるこ
 橋寺まて三十間ありと立續之
 ち方角お違ね多可有は生
 をたへかゝる而已



武藏國江戸庄の郡分

多摩郡

中野 高井戸

荏原郡

品川 北沢 目黒 池上

江戸赤羽根川の流南の方より西の方へ廻り海へ向

豊島郡

江戸東へ隅田川西へ代々木幡ヶ谷鳴子町南へ増上寺北へ板橋練馬荒川より南の方

足立郡

十住

郡界の曲直一なりて江戸を在のまづふるところに界ありて其後を
とて記す

赤羽根川を在系郡豊島郡の界とすといども廣尾系豊後
村を豊島に入る白旗目黒ハ在系郡あり青山宮益所豊後郡
を用を隔て上目黒を在系郡に属すといふは渋谷郷大方面
豊島あり上中下北條を在系郡の限りといふ高井戸も多摩
郡あり柏木鳴子町ハ豊島にて中野村も多摩に属す比企
高藤大里横見男衾兒玉等ハ國の小よりてかの一二の村に
ふ六七の村ありて是は皆小村あり

一 比佐番大なるものありて是の川
つたの邊を介東南西北法侍の
市を設けし寸ありてはむか
一 東のせん志の口廿二ありて
の介を日本橋より九回六里ありて
奥州海邊これなり
一 南の志を志の川口これを二十里にわた
はく也東海乃これなり
一 西の町つきの小治町口むき一あり
はく返り日本橋より關東道三十七八
たもはく是ハ小國海乃
一 小の井田板橋王寺より三十四里に
右之通をち方角お違ね多し有は
作備の取寄をち加る而已

此文の已小載る寛永圖ハ
あるはところなり本文と
きれぐりもくよみやハ
わらひに縮字一
て全文をあらうく
やま

御江戸圖説集覽

貳編 三編 追々近刻

右次海の寛文延宝の坊街の愛草とてこりて訂正し其の誤謬を正し
く種々法書に採りて中をなせる年歴を修るにあらざる大江戸の概を成りて
さるる事と徴する由を密に國恩の程有とあらざるもむるをこれ四方の諸君子
追々次海を採りて一覽を希とせん

橋本 兼次郎 原稿 繪圖

嘉永六癸丑

山崎 久 作輯 說

初春開版

宮城 喜三郎 淨書

江川 仙太郎 彫刻

和漢圖書出版發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目

藤井利八

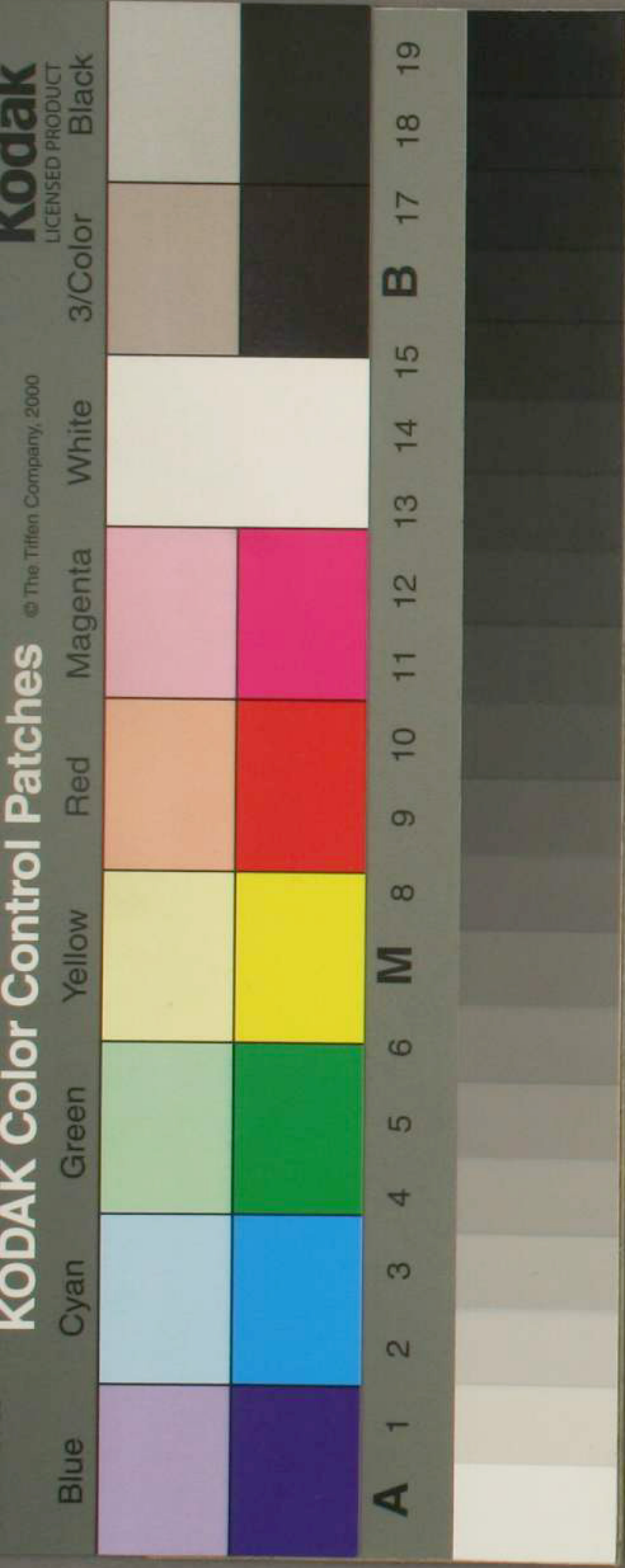
東京市京橋區南傳馬町二丁目

松山堂書店

發行兼
印刷者

發行所





清江名園說集覽

